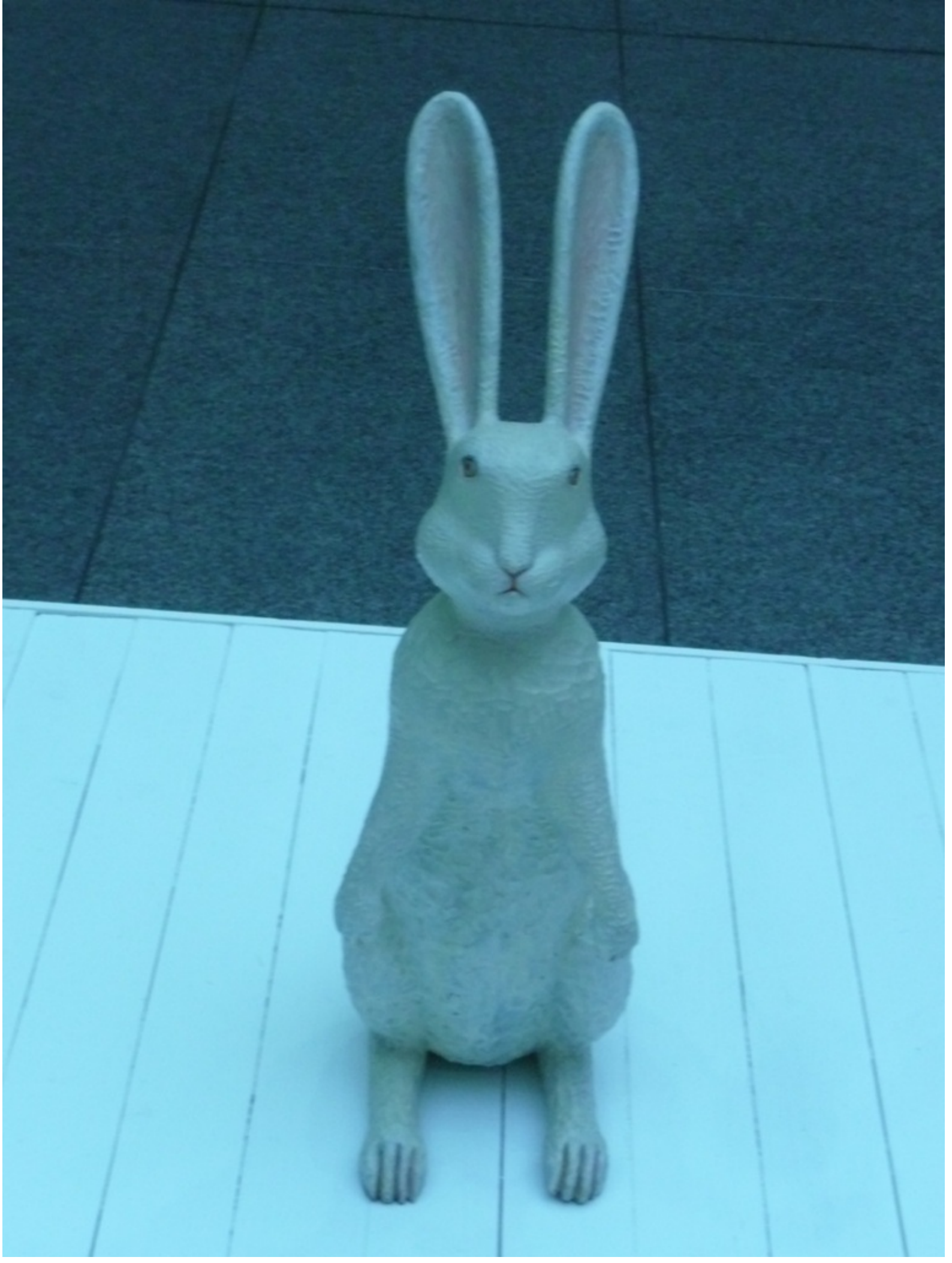

一　出会いの四月

「みなさん、席に着いて」
　担任の川崎先生が教壇に立っている。その横には、見知らぬ女の子がいる。髪はおかっぱで、目が大きい。肌の色は白い。いや、白いと言うよりも透明だ。血管が青く浮き出ている。でも、見た目は普通の女の子だ。
「みなさんに紹介します。転校生の龍野子すーちーさんです」
　名前を呼ばれた女の子がお時儀をした。
「龍野子すーちーです。よろしくお願いします」
　女の子は首をかしげるようにして頭を下げた。にこっと笑った口元からきらりと光る物が見えた。八重歯だ。可愛い。でも、噛まれたら血が出そうにくらい、とがっている。
「それじゃあ、龍野子さん。鈴木さんの隣に座ってください」
「はい」
　あたしは急に名前を呼ばれたものだから、起立して、思わず返事をしてしまった。
「鈴木さんは返事をしなくてもいいのよ」
「はい」
　また、返事をしてしまった。教室中から笑い声が上がる。あたしは顔を真っ赤にして俯いて座った。
「よろしくね」
　すーちーちゃんがあたしの隣の席に座った。やっぱり、八重歯がきらりと光った。彼女の魅力だけど、あたしにとっては何だか少し怖い。
「よろしく。あたしは鈴木さやか。さやかって呼んで」
「さやかちゃんね。あたしもすーちーと呼んで」
　すーちーちゃんの目が悩ましい。あたしの顔は見ないで、あたしの首筋を見ているような気がする。思わず。首筋を手で触る。それに気づいたのか、すーちーちゃんはあたしの首筋から目をそらし、前に向いた。あたしも先生の方に目を遣った。
「さあ、教科書のページを開けて」
　川崎先生が黒板に向いた。
　あたしは机の下から教科書とノートを取り出す。隣を見る。すーちーちゃんの机の上には何もない。転校してきたばかりだから、まだ、教科書がないのだろう。
「一緒に見ようか？」
　すーちーちゃんに声を掛ける。
「ありがとう」
　あたしは机を横にずらし、すーちーちゃんの机に引っ付ける。椅子も横にガタリと寄せた。教科書を真ん中において、二人で見る。先生が黒板に説明を書く。あたしはノートに写す。ふと、横を見る。すーちーちゃんはノートを出していない。ノートも忘れたのか。

「ノートも貸してあげようか？」
「ううん。いらないの」
「いらないって？」
「全部、頭の中で覚えるから」
「すごいんだ」
「だって、その方が面倒くさくないの。その代わり、教科書をちょっと貸して？」
「いいよ」
　すーちーちゃんは教科書を両手で持つと、顔に近づけた。そして、おもむろに、教科書にキスをした。あたしはびっくりした。
「何をしているの？」
「キスをすると、教科書の中身があたしの頭の中に滑り込んでくるの」
「ほんと？」
「ほんとよ」
　すーちーちゃんは真面目な顔でうなずく。でも、本当だったら、すごいし、楽だ。授業に出なくても、ノートを取らなくても、全て知識が入るのだったら、復習しなくてもいい。
「ちょっと、貸して」
　すーちーちゃんがあたしの筆箱から鉛筆を取り出した。鉛筆を口に咥えた。キスをしている。ちゅうちゅうしている。
「この鉛筆。さやかちゃんのおばあちゃんに買ってもらったの？」
　あたしは鉛筆を受け取った。普段は、お母さんが買ってくれるけれど、この鉛筆は違う。おばあちゃんの家に行った時に、おばあちゃんがくれた鉛筆だ。
「どうしてわかるの？」
「鉛筆がそう言っているの。ちゅうちゅうしたら鉛筆が教えてくれるんだ」
　あたしはすーちーちゃんから鉛筆をもらい、同じようにちゅうちゅうしたけれど、鉛筆の味がするだけだ。何にもわからない。鉛筆は何も語ってくれない。
　すーちーちゃんは、あたしをからかっているんだ。鉛筆の件は、偶然に当たっただけだ。それなら・・・。
「じゃあ。この消しゴムは？」
　すーちーちゃんはあたしから消しゴムを受け取ると、口を引っ付けて、ちゅうちゅうしだした。
「これ、さやかちゃんのお兄ちゃんのものじゃないの。お兄ちゃんが、困って探しているよ」
　そうだった。あたしは消しゴムがないからおにいちゃんの筆箱から勝手に持って来たんだ。
「どうしてわかるの？」
「わかるんじゃなくて、消しゴムがそう言っているの」
　不思議なことを言うすーちーちゃんだ。あたしも、消しゴムの臭いを嗅いで、キスをするけど苦い味はしても、消しゴムは何もしゃべってくれない。

「誰？授業中に、おしゃべりをしているのは」
　川崎先生が黒板から振り返った。あたしとすーちーちゃんは頭を下げて、ノートを取るまねをした。すーちーちゃんは謎の女の子だ。
　午前中の授業が終わり、給食の時間だ。同級生たちは立ち上がり、机を向かい合わせにする。あたしは給食当番だ。白いかっぽう着を被り、おかずを配る。今日のおかずはシャケのフライだ。みんなの皿にひとつひとつ配っていく。
　すーちーちゃんの前に来た。にこっと笑った。八重歯が光る。
「どうぞ」
「ありがとう」
　赤い切り身がすーちーちゃんの目の前の皿に置かれた。一瞬だが、すーちーちゃんの目が大きく開き、口から、あの八重歯が飛び出したかのように見えた。
「あっ」
　あたしは驚いて、シャケの入った箱を落としそうになった。
「大丈夫？」
　すーちーちゃんが箱を支えてくれた。
「ありがとう」
　すーちーちゃんの顔が真近に見えた。目も普通の大きさで、口から八重歯が飛び出してはいなかった。あたしの見間違い、勘違いだ、のはずだ。
　すーちーちゃんは椅子に戻った。あたしは何事もなかったかのように、シャケのフライをみんなに配った。
「いただきます」
　川崎先生の声に続いて、みんなの「いただきまあーす」の合唱が教室に響き渡った。
　あたしは箸を持ったまま手を合わせる。あたしの横は橋本君。あたしの前はすーちーちゃん。すーちーちゃんの横は山本君。四人が一緒に給食を食べる。給食のメニューは、コッペパンと牛乳とバナナとシャケのフライとサラダだ。
　あたしは最初に牛乳を飲む。口の中が乾いていると食べづらいからだ。いつも、そうする。あたしの習慣だ。癖だ。
　いつからだろう、そんな癖は。多分、小さい頃、おばあちゃんの家で、いつも、おばあちゃんがおまんじゅうを食べる前にお茶を飲んでいたので、子ども心に、食べ物を食べる前には、ひと口、何かの飲みものを口に含む癖がついたのだ。そんなことを思いだしながら、ごくと喉を鳴らす。何か視線を感じた。すーちーちゃんの目だ。
「何か、あたしの喉に何かついている？」
「うううん。そんなんじゃないの。さやかちゃんは、美味しそうに牛乳を飲むから」
「あたし、いつも、パンやおかずを食べる前に、牛乳をひと口、飲むのが癖なの」
「そうなの。でも、美味しそうに飲むのね」
　すーちーちゃんは、今度は、あたしの隣の橋本君、そして、横隣の山本君を見た。食べている姿を見ているようだが、すーちーちゃんの目は、明らかに二人の喉を見ている。パンやサラダが

口に放り込まれ、口の中で動き、喉を通る様子をじっと眺めている。
「ごちそうさま」
　山本君が食べ終わった。でも、シャケが半分残っている。
「全部食べないと、先生に怒られるよ」
　あたしが山本君に注意する。
「そうだよ、山本。早く食べ終わって、ドッジボールに行こうとしているんだろうけど、俺も早く食べ終わるから、待ってくれよ」
「そんなんじゃないんだ。このシャケ、きれいに焼けていないから、少し生なんだよ。俺、魚の生は苦手なんだ」
「へえ、そうなんだ」
「山本は、ぜいたくだぞ」
「嫌いな物は嫌いなんだ」
「先生に、注意されるわよ」
「ドッボールに行けなくてもしらないぞ」
　あたしと橋本君が山本君に脅しをかける。
　すると、突然、すーちーちゃんが
「じゃあ、あたしが食べる」と、手でシャケのフライを掴むと口の中に放り込んだ。あっけに取られる三人。
「美味しいじゃない。何でも、生のほうが、特に、血がしたたるほうが美味しいのよ。ごちそうさま」
　すーちーちゃんは、続いて、自分の給食を全てたいらげると、空になった食器を片づけに、席を立った。
　あたしと橋本君と山本君は、お互いに顔を見合わせる。
「おっ、助かった」
　山本君は、すーちーちゃんに続いて、席を立った。
　休憩時間になった。橋本君や山本君を始め、男の子たちが教室を飛び出して行く。
「すーちーちゃんも行こう」
　あたしは誘う。
「どこへ？」
「運動場。みんな、ドッジボールをやっているの」
「ドッジボール？」
「ドッジボールを知らないの？相手に向かってボールを投げて、ボールを取れなければアウトになるゲームよ」
「知っているわ」
「じゃあ。行こう」
　あたしとすーちーちゃんは教室を出した。運動場のあちこちでは、上級生や下級生、他のクラ

スの人たちが、所狭しとコートを引いて、ドッジボールを楽しんでいる。
「いた、いた」
　運動場の北側のプールの近くで、山本君がボールを投げ、橋本君がそのボールを受けている姿が見えた。
「あそこよ」
　あたしたちは走った。
「仲間に入れてよ」
「いいよ。こっちにはいってくれよ。こっちの方が人数は少ないんだ」
　ボールを持った山本君が顔を向けた。
　あたしはコートの中に入ろうとした。でも、何かが足りない。そう、すーちーちゃんがいない。後ろを振り返る。すーちーちゃんがよたよたと走りながらやってくる。すーちーちゃんは走るのが苦手なんだ。
「大丈夫？」
「大丈夫。あたし、あんまり日光に当たるのが苦手なの」
　確かに、すーちーちゃんは、顔は色白だ。色黒のあたしと反対だ。その白い顔に青みがさしている。
「ドッジボールできる？」
「できるよ」
「じゃあ、やろう」
　あたしとすーちーちゃんは山本君のいるチームに入った。ボールは相手チームが支配している。内野から外野、外野から内野にパスが行き交う。その度ごとに、あたしたちはコートの中を前に進んだり、後ろに下がったりする。
　シュー。相手チームの橋本君があたしに向かってアタックしてきた。顔面の高さだ。やばい。あたしは頭を下げた。バシ。あたしの後ろで音がした。誰かが当たった。でも、ボールは近くに転がっていない。後ろを振り向いた。すーちーちゃんだ。すーちーちゃんが顔面でボールを受け止めている。すごい。走るのは苦手かも知れないけれど、ボールをキャッチするのは上手い。
でも、顔面では受けたくない。
「ナイス、キャッチ」
　あたしが声を掛ける。でも、すーちーちゃんは顔にボールをくっつけたまま動こうとしない。その姿を見て、あたしたちは一瞬凍りついた。やばい。どうなって何が、いや、何がどうなっているのか、わからない。
「すーちーちゃん？大丈夫？顔が痛いの？鼻血がでたの？」
　ようやく、あたしはすーちーちゃんに近づいた。
「ボゴボゴボゴ」
　何を言っているのかわからないけれど、何かに必死に取り組んでいるように見える。何に？
あたしはさらにすーちーちゃんの側に寄った。ボールと顔の隙間から覗いた。
「何しているの？」

　すーちーちゃんはようやく顔面からボールを離すと
「ちゅうちゅうしているの」としゃべった。そう、　すーちーちゃんは顔面のボールの中の空気を吸いこもうとしていたのだ。
「でも、なかなか吸いこめないの」
　あたしは立ち止ったまま、再び凍りついた。昼休みの終了の音楽が流れ出した。
「みんな、いこ。鈴木、後は頼んだぞ」
　山本君たちは、あたしたちを置き去りにすると、一斉に教室に向かって駆けだした。あたしとすーちーちゃんだけが運動場に取り残された。すーちーちゃんは相変わらずボールの中の空気を吸い続け、あたしはその様子を固まったまま見つめていた。
　いつものことながら、給食を食べ、昼休みに運動をした後は、眠たくなる。目は、お客さんの多いスーパーの自動ドアのように、開いたり閉じられたりが繰り返され、先生がしゃべっている声が遠くになったり、近くになったりして聞える。頭は、こっくりこっくりの永久運動をし始めた。もうだめだ。あたしは教室にいながら、魔法のじゅうたんで眠りの宮殿に飛んで行く。その絨毯がある音で地面に落ちた。
「ガリリ、ガリリ、ガリリ」
　何の音？音のする方、それは左側から聞える。左側には、すーちーちゃん。寝ている。机に顔を伏せている。その音は、いびき？歯ぎしり？いや、歯で机を齧っている音だ。すーちーちゃんの八重歯が、前歯が、横歯が、奥歯が、机の角を噛んでいる。
「ガリリ、ガリリ、ガリリ」
　その音に、クラス中の視線が集まる。
「すーちーちゃん」
　あたしは小さな声で呼んだ。
　だが、「ガリリ、ガリリ、ガリリ」の答えが返って来るのみ。ダメだ。起きない。すたすたすたと足音がした。先生だ。先生がすーちーちゃんの机の横に立った。
「龍野子さん。起きなさい。今は、授業中ですよ」
　優しい声だが、怒気を含んでいる。
　その声に対しても、「ガリリ、ガリリ、ガリリ」と返事するすーちーちゃん。
「龍野子さん。起きなさい」先生山が噴火した。溶岩が流れだした。
「龍野子さん！」
「ガリリリリ」
　その声に驚いたのか、すーちーちゃんが突然、先生の手を噛んだ。
「ひえー」
　先生は驚きのあまり、卒倒しそうなった。あたしは、すーちーちゃんを先生の手から引き離し、あたしの前の席の山本君と橋本君が崩れ落ちる先生を支えた。すーちーちゃんは眠ったままで、再び、机の端をガリリと噛んでいた。

二　運動会の五月

「さあ、体操をしますよ」
　あたしたちは体育の授業中だった。今日は、徒競争の練習だ。もうすぐ、運動会がある。その予行練習だ。その前に、体を慣らすため、ラジオ体操をする。みんな、ぶつからないように、両手を広げて間隔をとる。体育委員の松崎君がみんなの前に立ち、号令のもと、体操が始まった。
「いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち。いち、に、さん、し、ご、ろく、なな、はち。」
　体操が終わった後、先生の指示で、徒競争が始まる。あたしとすーちーちゃんは背丈が同じくらいなので、一緒に走ることになった。次々と同級生たちが走っていく。さあ、あたしたちの番だ。
「ようい。どん」
　先生が旗を上げ、掛け声を上げる。あたしたちは飛び出した。でも、あたしが一番遅い。目の前を、ゆかりちゃん、ともこちゃん、すーちーちゃんが走る、コーナーを曲がり、最後の直線だ。
　その時、すーちーちゃんが転んだ。あたしはそのままゴールした。ゴールした後、振り返る。すーちーちゃんは転んだままだ。先生がスタート地点から、「龍野子さん。大丈夫？」と大声を上げた。あたしはゴールから戻って、すーちーちゃんを助け起こしにいった。
「だいじょうぶ？痛いの？」
「うん、だいじょうぶ」
　すーちーちゃんは自分で立ち上がった。徒競争のコースから外れる。すぐに、次の組が走って来た。
「あれ、膝から血が出ているよ」
　あたしはすーちーちゃんの膝から血が出ているのがわかった。
「血？」
　すーちーちゃんは自分の膝頭を見る。
「血だ・・・・」
　そのまま崩れ落ちるすーちーちゃん。
「すーちーちゃん。すーちーちゃん」
　あたしはすーちーちゃんを抱き起こした。でも、すーちーちゃんは目をつぶったまま、返事をしなかった。気を失ったのか。
「ここ、どこ？」
　すーちーちゃんが目を覚ました。
「保健室よ。大丈夫？気絶したからびっくりしたわ」
　あたしは、すーちーちゃんに徒競争の練習中に転んで、血を見た途端、気を失なったことを説明した。
「うん。そうなの。あたし、血を見るとびっくりするの」

「へえ。そうなの」
　あたしは、なんだか安心した。謎の多いすーちーちゃんだけど、血を見ると気を失うなんて、可愛いし、おとっちゃまだ。
「お母さんを呼ばなくてもいい？」
「大丈夫。すぐに元気になるから。傷はどうなっているかな」
　すーちーちゃんは、シーツをめくり、傷を見る。傷は右足の膝頭だった。絆創膏を貼っている。すーちーちゃんは膝を曲げ、膝を胸に抱き寄せる。
「どうかな？」
　すーちーちゃんが絆創膏の端をめくる。
「もう、痛くないの？」
　あたしが尋ねる。
「うん、痛くない」
「傷を見るの怖くないの？」
「うん、怖くない」
　すーちーちゃんが絆創膏をはがした。すごい。あたしだったら、傷跡を見るなんてできない。傷は血が止まっていた。でも、まだ十分には乾いていなかった。傷跡から、血がにじんできた。
「血だ」
　すーちーちゃんは、再び、ベッドに倒れた。
「すーちーちゃん、すーちーちゃん」
　あたしはすーちーちゃんの肩を揺すりながら、に何回も声を掛けたけれど、返事はなかった。
「すーちーちゃん、帰ろう」
「うん。帰ろう」
　すーちーちゃんは、しばらくの間、ベッドで横になってから、教室に戻って来た。算数の授業も、国語の授業も、社会の授業も、誰かわかる人？と先生が質問すると、積極的に手を上げ、全て正解だった。
「すーちーちゃんって、頭がいいのね」
　あたしが休み時間に尋ねると
「ううん。頭がいいんじゃなくて、何でも吸収するだけ」
「吸収？」
「そう。あたし、ちゅうちゅうするのが好きなの。だから、勉強でも、食べ物でも、何でもちゅうちゅうするの」
「そうなの。じゃあ、あたしもちゅうちゅうするの？」
「ううん。さやかちゃんは、あたしの友だちだからちゅうちゅうしない」
　そう言いながら、すーちーちゃんの目がぎらりと光った。あたしの首筋に鳥肌が立つ。寒い。あたしは思わず首に両手をやる。あったかい。生きているんだ。すーちーちゃんは空に目を転じた。

「あの雲、何かに似ていない」
　あたしも空を見上げる。
「あんぱんかな？」
　あたしが先に答えた。
「神社の駒犬よ」
　続いて、すーちーちゃんが答える。
「ソフトクリーム？」
「神社のお供えのバナナよ」
「ホットケーキ？」
「神社にいるこうもりよ」
　あたしとすーちーちゃんはまるで発想が違う。四つ角に来た。左に曲がればあたしの家。右に曲がればすーちーちゃんの家らしい。
「じゃあ、バイバイ」
　すーちーちゃんはあたしに手を振った。
「バイバイ」
　あたしもすーちーちゃんに手を振る。そう言えば、すーちーちゃんの家はどこだろう。今まで、家がどこにあるか、話をしたことはなかった。あたしは四つ角に立ち止まったまま、すーちーちゃんの後ろ姿を見つめる。すーちーちゃんは神社の鳥居をくぐった。そっちに行けば、神社の社殿があるだけだ。家までの近道があるんだろうか。あたしは不思議に思いながらも、すーちーちゃんの後姿が見えなくなるまで、その場でじっと立っていた。

三　おうち訪問の六月

「起立。礼。先生、さようなら。皆さん、さようなら」
日直の山西君の号令のもと、お互いに挨拶を交わして、帰り支度を始めた。すーちーちゃんは、いつものように昼寝からは目覚めている。
「帰ろ！」
　あたしはすーちーちゃんに声を掛けた。
「うん」
　二人ともランドセルを背負い、教室を出た。
「すーちーちゃん、本当に覚えていないの？」
　あたしは、以前、すーちーちゃんが先生の手首を噛んだことを尋ねた。
「本当に覚えていないの。夢の中で、何かを食べていたような気がしたけど・・・。給食を食べたんだけど、まだ、お腹が空いているみたい、えへへ」
　すーちーちゃんは制服の上からお腹を触る。引っこんでいるのか、膨れているのか、あたしにはわからない。でも、例え、夢だとしても、誰かに、それも先生の手に噛みつくのはすごい。このすごさは、もちろん、尊敬と言うよりも恐怖と言う意味だ。あどけない顔のすーちーちゃんだけど、少し、怖い。でも、何だか、不思議だ。この謎を解いてみたい。
　四つ角に来た。あたしの家はここから左に曲がる。右に曲がれば、すーちーちゃんの家の方向だ。そう言えば、一緒に帰っていたけれど、すーちーちゃんの家に行ったことはなかった。あたしがすーちーちゃんに別れを告げようとすると
「もし、よかったら、家に来ない。家にはママがいるの。おやつもあるわ」
すーちーちゃんから誘いがあった。今日は、塾がなかった。時間はある。折角の誘いだ。断る理由がない。それに、もう少し、すーちーちゃんのことを知りたいと思った。すーちーちゃんの家に行けば、謎が解けるかも知れない。
「いいの？」
　一応、確認する。
「いいよ」
　すーちーちゃんの顔を見る限りでは、お世辞じゃなさそうだ。
「じゃあ。行く」
あたしは二つ返事で答えた。
「じゃあ、こっち」
四つ角をあたしの家の方向と反対方向の右に曲がった。そっちには、神社があるはずだ。以前、すーちーちゃんの後姿から、神社を通るのは知っていた。すーちーちゃんは真っすぐに進む。
「ここよ」
　あたしの思った通り、そこは神社だった。鳥居をくぐり抜けた。
「ここ、神社じゃないの？近道でもあるの？」

　あたしはすーちーちゃんに尋ねた。
「そうよ。神社よ。神社があたしの家なの」
「なんだ、そうなの」
　あたしは納得した。だけど、この神社は本殿と社務所があるだけの小さな神社だ。これまで人が住んでいた様子はなかった。お正月にはたくさんの人がお参りで賑わうけれど、普段は、時に、近所の人がお参りするだけで、ひっそりとしている。
　ただし、夏になると、神社の裏の林からは、眠りから覚めた蝉が、七年間の沈黙を取り戻すかのように、やかましく、時には、心地よく、鳴き続ける。互いに、勝手に鳴いているのだけれど、聴いている方からすれば、一定のハーモニーで、調和がとれている。
　だから、神社に蝉取りに来た時でも、あんなにやかましく鳴いている蝉の声なのに、鳴き声を聴いていると、木立の中の涼しさもあって、網を持ったまま座り込んで、うとうとと、眠りの世界に引き込まれてしまう。そんな場所に、蝉の他に人が住んでいたなんて。

　すーちーちゃんは賽銭箱の前で、鈴を鳴らし、二回頭を下げ、二回拍手をして一回頭を下げると、靴を脱ぎ、脱いだ靴を持ったまま、「ただいま」と社殿の中に入っていった。
　あたしも、すーちーちゃんのやったとおり、見よう見まねで、鈴を鳴らし、二礼二拍手一礼すると、「おじゃします」と、すーちーちゃんの後に続いた。
　お正月にお参りに来た時に、賽銭箱の前に立って、社殿の中を覗いたことはあるけれど、中に入るのは初めてだった。正面には大きな祭壇と丸い鏡があった。後は畳が敷いているだけで、テレビもなく冷蔵庫もなくクーラーもなく、とても人が住んでいるようには見えなかった。
「こっち、こっち」
　すーちーちゃんが手招きをする。あたしは祭壇の後ろに回った。ドアがある。
「どうぞ」
　ドアを開けると階段があった。階段を降りた。そこには、広い居間があった。ソファーがあり、テーブルがあり、テレビが置いてあった。広い。社殿よりも広く感じた。社殿の下に、こんな部屋があるなんて。まさかと思って、目を瞑って、目を開けたけれど、やっぱり同じ風景だった。夢じゃない。
「ちょっと座っていて」
　すーちーちゃんはあたしにそう言うと、別のドアから出て行った。あたしは、すーちーちゃんに促されるまま、ソファーに座った。やっぱり、夢じゃないかな。あたしは首をひねる。あたしはソファーを右手で触った。皮の手触りがする。本当のソファーだ。テレビも触ったけれど、固い。床に敷いてある絨毯に座った。毛がふさふさしている。やっぱり本物だ。夢じゃないんだ。
「お待たせ」
　ドアが開いた。すーちーちゃんが入って来た。あたしは急いで立ち上がって、ソファーに座り直す。すーちーちゃんの服装は、赤いセーターに赤いスカート、赤いソックスに赤いスリッパ。手に持っているトレイも赤。そのトレイの上には、二つのコップ。赤い飲み物が入っている。ほ

っぺもほんのり赤い。笑った唇も赤い。赤一色だ。その様子を見たあたしの目も真っ赤に染まっていることだろう。
「どうぞ」
　すーちーちゃんが赤い飲み物を手渡してくれた。
「これ、何？」
「トマトジュースよ」
「トマトジュース？」
「そう、トマトジュースよ。甘くて美味しいのよ」
　そう言うとストローでちゅうちゅう吸いはじめた。ストローの中を赤い液体が上昇し、すーちーちゃんの口の中に吸いこまれていく。あたしもつられて、ちゅうちゅうする。飲みものを飲むときは、ちゅうちゅうと音を出した方がいい。お母さんからは音を出さないように注意されるけれど、ちゅうちゅうと音がしたほうが、美味しさが舌からだけでなく耳からも伝わってくる。二重の幸せに包まれる気がする。二人は沈黙の中、ちゅうちゅうという音だけが部屋の中に響き渡った。
　あたしとすーちーちゃんはソファーに横に並んで座り、仲良く、トマトジュースをちゅうちゅうしていると、「いらっつしゃい」の声とともに、ドアが開いた。そこには、全身白ずくめの女の人が立っていた。白いのは服だけでない。微笑んだ顔も、お盆を持った手も、真っ白だった。
「よく、来てくれましたね」
　女の人はあたしの斜め前に座った。お盆からお菓子を置いた。クッキーだった。その置いた手首は色の白さの上に青白い静脈が浮き上がっていた。それくらい、透き通るような白さだ。すーちーちゃんも肌の色が白いけれど、女の人はもっと白い。
「あっ、ママ。友だちの鈴木さやかさん」
　すーちーちゃんがあたしを紹介してくれた。
「鈴木です」
　あたしはコップを持ったまま、立ち上がり、ペコリと頭を下げた。
「鈴木さんね。すーちーの母親です。よく家に来てくれましたね。すーちーは転校してばかりなので、すーちーの友だちになってあげてね」
　お母さんがやさしく微笑む。顔まで透き通っている。壁が写りそうだ。あたしはその白さにどぎまぎする。微笑んだ口元から歯が見える八重歯だ。きらりと光る。すーちーちゃんと同じだ。すーちーちゃんはお母さんに似たんだ。

　テーブルの上のクッキーに下から手が伸びてきた。誰の手？すーちーちゃんではない。すーちーちゃんのママでもない。もちろん、あたしの両手は膝の上だ。
「こら。竜太郎」
　すーちーちゃんが叫び、その手をぴしゃりと叩いた。
「痛っ。えへへへ」
　男の子が立ち上がった。シャツもズボンも靴下も全身青色だ。顔だけは色白だ。すーちーちゃ

んの家族は服の色を統一するのが家風なのか、それとも個人の好みなのか。
「だめよ。竜太郎。このおやつはお姉ちゃんとお姉ちゃんのお友達のものよ。あなたには別にとってあるから」
　お母さんがやさしく諭す。
「だって、一緒に食べたいんだもの」
　竜太郎君はあたしに向かってにこっとした。にこっとした口元から八重歯が光った。すーちーちゃんそっくりだ。お母さんにもそっくりだ。
「ママ。僕にもジュースをちょうだい」
　寝転がっていた竜太郎君がテーブルの前に座った。
「ちょっと待っててね」
　すーちーちゃんのママは部屋から出て行った。
　ぽりぽりぽり。竜太郎君は口の中をいっぱいにして、クッキーをほおばる。
「食べ過ぎよ。竜太郎。あたしやさやかちゃんの分がなくなるじゃない」
　すーちーちゃんが怒る。
「だって、美味しいんだもの」
「もう。おしまい。はい。さやかちゃんも食べて」
　すーちーちゃんはお菓子箱を持ち上げて自分の胸に引き寄せる。
「あっ、もっと欲しいのに」
　竜太郎君は手を伸ばすけれど、お菓子箱には届かなかった。あたしはすーちーちゃんからクッキーを一枚受け取った。口の中に入れる。ぽりぽりぽり。
「美味しい」声を上げた。
　すーちーちゃんはキラリと光る八重歯を剥き出しにして、にこっと笑った。
「美味しいでしょう。ママの手づくりなの」
　すーちーちゃんがぽりぽりぽりと美味しそうに食べる。あたしもぽりぽりぽりと食べる。　竜太郎君もぽりぽりぽりと食べる。ぽりぽりぽりの三人の輪唱が続く。クッキーは美味しい。特に、クッキーの中に入っている黒い部分が美味しい。
「これ、何？」
　あたしはすーちーちゃんに尋ねる。
「セミやミミズだよ。おねえちゃん、そんなことも知らないの。神社にはセミの幼虫がたくさん眠っているんだ。夏になると、土の中からセミが出てくるから、それを捕まえて食べるんだ。それに、裏庭にはミミズがたくさんいるんだ。めっちゃ、美味しいよ」
　竜太郎君がすぐに答える。あたしの黒目は点に収縮し、やがて全てが真っ白になった。
　セミ、セミ、セミ。あたしの頭の中をセミが飛んでいる。ミミズ、ミミズ、ミミズ。あたしの脳ミソの皺をミミズが這っている。
「こら、竜太郎。変なこと言うんじゃない」
　すーちーちゃんが弟の頭をげんこつでポカリと殴る。

「痛い。だって、ホントのことだもの」
　再び、すーちーちゃんが弟の頭を殴る。
「ごめんね、さやかちゃん。弟が変なこと言って」
「変なことじゃないよ。ホントのことだよ」
ポカリ。もう一度、すーちーちゃんが弟の頭を殴った。あたしは食べるのをやめた。
「あっ、もう、帰らないと」
　あたしは立ち上がった。
「そう。じゃあ、また来てね」
　すーちーちゃんがあたしを玄関まで見送ってくれた。入って来た階段とは違う場所だ。竜太郎君も一緒だ。照明の下では、すーちーちゃんと竜太郎君の影がこうもりの姿のように見えた。あたしも思わず自分の影を見た。よかった。人間の影だった。あたしは玄関の扉を開けた。玄関を出ると、あたしは神社の鳥居の下に立っていた。
「ただいま」
　あたしはすーちーちゃんの家（？）または神社から出ると、自宅に戻った。
「おかえりなさい。遅かったね」
　ママが返事をする。
「友だちの家に行っていたの」
「そう。誰なの？」
「すーちーちゃんって言うの」
「すーちーちゃん？変わった名前ね。お家はどこなの？」
「神社」
「神社？」
「うん。近くの神社」
「すーちーちゃんのお父さんは神主さんなの？それに、あそこの神社は、神主さんが住んでいたの？」
「お父さんには会っていないけれど、お母さんは色がものすごく白かった。青白いくらい」
「そうなの。ひょっとしたら、巫女さんなのかな」
「巫女？」

「ほら。お正月に、おみくじやお札を渡したりする人がいるでしょう」
そう言えば、すーちーちゃんのお母さんは優雅な振る舞いをしていた。そうだ、巫女なんだ。それじゃあ、すーちーちゃんも大人になったら、巫女さんになるのかな。あたしは、ママにはあたりさわりのない話しかしなかった。すーちーちゃんのことは少し不思議な女の子だと感じながらも、仲良くしたいと思っていた。ここで、すーちーちゃんの変なことを話すと付き合うのやめなさいと言われそうだったからだ。
食事が終わり、テレビを見ていると、パパが仕事から家に帰って来た。ママからパパにすーちーちゃんのことが話された。パパは缶ビールを飲みながら、「へえ。神主さんの娘さんか。いい

んじゃない」と、何がいいのかわからないけど、返事をした。
　あたしは、パパとママに「おやすみなさい」を告げると、ベッドにもぐりこんだ。大きな目と魅力的な八重歯が印象的なすーちーちゃんの顔が浮かんだ。あたしの心は、すーちーちゃんにちゅうちゅうしているのかもしれない。
「おやすみ。すーちーちゃん」
　あたしは灯を消した。部屋は真っ暗になった。
「.さやかちゃん」
「こら、竜太郎」
竜太郎君とすーちーちゃんの声だ。まさか。こんな夜中に。あたしは、灯を点けると、窓の外のベランダに出た。春だけど、夜はまだ寒い。体を震わせ、周囲を見渡すけれど、外には誰もいなかった。ただ、何かが、ベランダから飛び去ったような気がした。でも、今は夜だ。こうもりじゃあるまいし、鳥は、夜、外を飛べないはずだ。
「気のせいか」
　あたしは窓を閉めると、ふとんの中に潜りこんだ。

四　プールの七月

　今日の体育授業は、水泳だ。暑い。こういう時は、プールに限る。給食を食べた後、水着に着替え、プールに向かう。
「きゃあ、冷たい」
　シャワーと消毒水に浸かる。次々と行列が続く。シャワーを浴びた人は、プールの前に並ぶ。先生がプールサイドに立つ。体操の時間だ。屈伸し、アキレス腱を伸ばし、膝をぐるぐる回し、肩を上下して、深呼吸。準備ＯＫ。
「さあ、水の中に入って」
　先生の号令の下、ゆっくりと足をつける。
「ドブン」
　男子の一人がいきなり飛び込んだ。
「こらっ。勝手に飛び込んだら、危ないでしょう」
　先生が注意する。みんなが並んで、プールの縁を掴む。あたしの横はすーちーちゃんだ。
「さあ、バタ足をして」
　一斉に、プールが泡立つ。顔を浸けていないので、足が、腰が、お腹が斜めに沈みそうになる。だから、よけいに、足をバタつかせる。すーちーちゃんはにこやかだ。あたしも笑顔で返す。
「さあ、顔をつけて」
　先生が指示する。あたしは顔をつける。本当は、顔が水に濡れるのはいやだけど、顔をつけないと泳げない。
「ぷわおお」
　すぐに息が苦しくなって、顔を上げ、足をつける。横を見ると、すーちーちゃんは、まだ、顔をつけている。すごい。息が長く続くんだ。
「ピー」
　先生の笛が鳴る。
「さあ、顔を上げて」
　クラスの全員が顔を上げた。いや、一人まだ顔をつけたままだ。すーちーちゃんだ。
「すーちーちゃん。もういいのよ」
　あたしはすーちーちゃんの肩を叩く。でも、すーちーちゃんは、顔をつけたまま、バタ足キックを続けている。
「すーちーちゃん。すーちーちゃん」
　あたしは声を掛け続ける。だが、すーちーちゃんは相変わらず顔をつけたまま、バタ足を続けている。でも、少し様子が変だ。すーちーちゃんの体が膨れてきている。そんな馬鹿な。あたしの気のせいか。いや、確かに膨れている。あたしの周囲の水がすーちーちゃんの方に勢いよく流れ込んでいる。渦が出来ている。すーちーちゃんが水を吸収しているのだ。様子がおかしいのに気が付いたのか、先生が近づいてきた。

「龍野子さん。龍野子さん」
　先生がプールに飛び込んだ。
「誰か、引っ張り上げて」
　先生がすーちーちゃんの体を抱く。男子がすーちーちゃんの両手を持つ。よいしょ、の掛け声で、すーちーちゃんをプールサイドに引っ張り上げた。すーちーちゃんは、目を瞑ったまま気を失っていた。だけど、口だけはパクパクと動いている。体は倍ぐらいに膨れ上がっていた。
　すーちーちゃんが目を開けた。
「すーちーちゃん、大丈夫？」
　よかった。気が付いた。すーちーちゃんは、保健室のベッドで横になったままだ。
「うん。元気よ。でも、おしっこがしたい」
　すーちーちゃんは、ベッドから素早く起き上がると、トイレに向かって駈けて行った。後ろ姿がポタン、ポタンと揺れている。しばらくすると、すーちーちゃんが帰って来た。元のスマートな体に戻っていた。すーちーちゃんは照れたように笑っている。
「先生。すーちーちゃんが目を覚ましました」
　あたしは教員室に先生を呼びに行く。先生が、保健室に戻って来た。先生は、すーちーちゃんのおでこに手を当て、体温を測ったり、手首を掴んで、脈を測ったりしている。
「もう、大丈夫のようね。教室に戻ってもいいわよ」
　あたしとすーちーちゃんとあたしは教室に向かう。
「ほんと、びっくりした」
「ごめんなさい。なんだか、急に、気を失ってしまって」
「でも、すーちーちゃんが、倍ぐらいに膨らんでしまったのには、びっくりしたわ」
「あたしもわからないけれど、水を飲み続けていたみたい」
「もう、お腹は大丈夫？」
「大丈夫。おしっこで全部出したから」
　あたしたちは教室に戻った。
　昼からの授業だ。すーすー。と寝息が聞こえる。
「誰、誰だろう」
　隣を見る。すーちーちゃんだ。すーちーちゃんが顔を机にうつ伏せになって、寝ている。多分、午前中の、プールの出来事が影響しているのだろう。あたしはそっとしてあげた。
　しばらくして、横を見る。すーちーちゃんは、まだ、寝ている。でも、様子が変だ。体が膨れ上がって来ている。プールの時と同じだ。確かに、寝息を聞くと、すーすーという寝息を聞くだけで、はーという吐く音が聞えない。
「すー、すー、すー」
　つまり、吸う、吸う、吸う、だ。でも、吸うばかりで、吐かないと、体が膨れ上がるばかりだ。いま、すーちーちゃんはそういう状態になっている。
「すーちーちゃん。すーちーちゃん」
　あたしは、すーちーちゃんに声を掛ける。でも、すーちーちゃんは返事をしない。今だに、息を

吸い続けている。そして、すーちーちゃんの体が浮いた。足が床から離れた。人間風船だ。人間気球だ。どこかに飛んでいくのか。あたしは、すーちーちゃんが飛び上がらないように、すーちーちゃんの服を引っ張った。
　このままじゃ、いけない。あたしは立ちあがった。
「先生、すーちーちゃんがおかしいんです」
　あたしの切羽詰まった声に先生はすぐに飛んできた。すーちーちゃんの異変を見て、地面から少し浮かんだすーちーちゃんの手を引っ張って、教室から出て行った。
　授業が終了した。先生によると、すーちーちゃんは、保健室では、目が覚めて、息をすったり、吐いたりしているそうだ。万が一に備えて、まだ保健室で寝ている。あたしは、保健室に向かった。保健室の扉を開く。すーちーちゃんはベッドに座っていた。
「大丈夫？」
　すーちーちゃんは、にこっと笑って、大丈夫、すー、はーと答えた。あたしは、すーちーちゃんにカバンを渡すと、帰ろうと声を掛けた。二人で学校を出た。あたしは、すーちーちゃんに、息を吸い続ける発作が起きないか、注意深く見守る。今のところ、変化はない。すー、はーとちゃんと呼吸をしている。すーちーちゃんの家の神社に着いた。
「さやかちゃん。ありがとう」
　すーちーちゃんと神社の鳥居で別れた。ほっと安心。その時、再び、すーすーすーという音が聞えた。あたしは振り返った。すーちーちゃんの発作だ。すーちーちゃんの体がまるまると、見る見るうちに膨らんでいく。あたしはすーちーちゃんの下に駆けつける。すーちーちゃんは風船のように膨らんで、浮かび上がっている。
「それ」
　あたしはすーちーちゃんを捕まえるためにジャンプした。でも、届かない。すーちーちゃんは鳥居よりも高く浮き上がった。なすすべもなく、茫然と見つめるあたし。
「すーちーちゃん」
　大声を上げて、呼び掛ける。
「すー、すー、すー」
　息を吸い続けるすーちーちゃんからの返事はない。その時、何かがすーちーちゃんにぶつかった。ふーという音とともに、すーちー風船はしぼんでいき、地面に落ちた。あたしはすーちーちゃんの下に駆けつける。
「大丈夫？」
　座り込んでいるすーちーちゃんの両手を握った。
「お尻が痛い」
　すーちーちゃんは、お尻を撫でながら、立ち上がった。
「何回も心配掛けてごめんね」
　すーちーちゃんは、神社の鈴を鳴らし、二礼二拍手すると、本殿の中にはいっていった。その側を黒い影のようなものがついて行く。その影に向かって、すーちーちゃんが「いきなりぶつかっ

てきたら、痛いじゃない」と、怒っている。その影は
「折角、助けてやったのに、なんだい。恩知らず」と答えると、どこかに飛んで行った。
　すーちーちゃんには、本当に、謎が多い。
　また、体育の水泳の時間だ。すーちーちゃんは、今日の授業を休んでいる。前回、水や空気を吸い過ぎるという発作が起きたので、今日は、プールサイドから、みんなの様子を見ることになった。
　いつものように、みんなは体操をして、プールサイドに座った。足はプールの中。
「さあ、バタ足の練習ですよ」
　先生の笛で、一斉に、バタ足をする。
「ジャバジャバジャバ」
「ジャバジャバジャバ」
　全員がバタ足をすると壮観だ。足を水面に打ちつけ、水面から上げる度に、水しぶきが上がる。噴水のようだ。
「ちょっと、用事を思い出したから、みんな、そのまま、バタ足を続けていて。絶対に、プールの中に入っちゃだめよ」
　先生がプールサイドから立ち去った。あたしたちは、ひたすら、バタ足を続けている。
「へえ、これ、面白いや」
　誰かの声がしたかと思うと、水しぶきが通常よりも高く上がった。
「負けるもんか」
　誰かが直ぐに声を出し、更に、水しぶきが高く上がった。
「俺の方がもっとすごいぞ」
　別の場所の男の子が足を大きく上げ、そのまま水面を打ちつけた。
「バシャン」
　噴水と言うよりも水柱だ。水柱は最高点に達すると、水玉となって水面に落ちる。花火ならぬ、花水だ。真っ青な空には届かないけれど、あたしたちの目の高さまで、花水玉が上がる。それを見て、みんなが真似をする。プールサイドには、一段と大きな水柱が上がり、花水が咲く。
「バシン」
　一段と大きな音がした。その方向を見る。すーちーちゃんだ。制服のまま、プールサイドに座って、両足を打ちつけている。水柱が自分の体より高く上がり、水は自分にもかかり体が濡れているけれど、全く気にしていない。
「すーちー、すごいや」
「俺も、やってみよう」
　あたしたちは、バタ足から両足に変わって、水面を打ちつける。
「バシン。バシン。バシン」
　これまで以上の高さの水柱が、次々と上がる。
「どうせだったら、みんな一緒にしようよ」

　あたしが提案した。
「おっ、いいね」
「さやか、号令をかけろよ」
　あたしは、いち、に、さん、と大声を上げた。さんの合図で、プールサイドのみんなが一斉に両足を、水面に叩きつけた。
「バシーン」
　プールの水面は、あたしたちの両足で押しつけられて、その反動で、盛り上がった。
「まだ、まだよ。もう、一回。いち、にい、さん」
「バシーン」
　さっきよりも大きな音がしたかと思うと、水面は盛り上がり、巨大な水柱となった。頂点の水玉があたしたちの体に降り注いだ。
「虹だ、虹だ」
　誰かが喜びの声を上げた。プールの端と端とを結んで虹の橋がかかった。その時、バシン、バシンと強烈な音がする。誰かがプールの水面を歩いていた。すーちーちゃんだ。
「すごいな、龍野子」
「水の上を渡れるんだ」
「俺、聞いたことがある。右足が沈む前に左足を出して、左足が沈む前に右足を出せば、水の上を歩くことができるんだって」
「でも、龍野子は水の上を叩いているぞ」
「俺たちにもできるかな」
「龍野子にもできるんだったら、できるよ」
　男の子たちが一斉に、すーちーちゃんの後を追った。
「ボッチャン。ボッチャン」
　音の子たちは一歩も水の上を歩くことなく、差し出した足から水の中に落ちた。
「誰。先生の許可なく、プールの中に入ったのは」
　ちょうどその時、先生が戻ってきた。
「それにしても、ちょっと、プールの水が減っていない？」
　あたしたちは素知らぬ顔で、プールサイドに立った。
「バシン。バシン」
　プールを渡り、反対側のプールサイドに座っているすーちーちゃんだけが、引き続き、足を水面に叩きつけていた。その上には、虹がかかっていた。神々しいすーちーちゃんだった。

五　夏祭りの八月

　　夏祭りだ。港では、花火大会が開催される。あたしは、すーちーちゃんと花火大会を見に行くことにした。すーちーちゃんの弟の竜太郎君も一緒だ。あたしも、すーちーちゃんも、竜太郎君も浴衣を着た。

　花火は、港の沖合三百メートルで打ち上げられる。観覧会場までは電車で行ける。電車を降り、駅の外に出ると、周囲はもう、人で混雑している。あたしたちは背が低いので、周りを大人たちに取り囲まれると、どっちに行ったらいいのかわからない。竜太郎君が飛び跳ねている。でも、前は見えない。仕方がないので、他の人が動く方向に進む。いや、進むと言うよりも、人波に流されていると言う方が正しい。

「わーい」

　竜太郎君が歓声を上げた。あたしたちが流れついたのは、広場だった。そこの周りには、お店が並んでいた。たこやき、スイートコーン、りんご飴、お好み焼き、ジュースに、綿菓子などを売っている。茶色や黄色、赤に、緑色など、いろんな色が出迎えてくれた。竜太郎君だけでない。あたしだって、「わーい」と喜んだ。すーちーちゃんも笑顔だ。竜太郎君が走り出した。

「竜太郎！どこへ行くの」

　すーちーちゃんが呼び止めた。でも、すーちーちゃんの声が聞えないのか、振り返らない。　仕方がない。あたしたちは竜太郎君の後を追って走った。竜太郎君が急に立ち止った。たこやき屋の前だ。

「ねえちゃん。お腹空いた！」

　自分の都合のいい時だけ振り返る竜太郎君。八重歯がきらりと光っている。すーちーちゃんと同じ八重歯だ。あたしたちは竜太郎君に追いついた。

「しょうがないわね。おじさん、一皿ください」

　すーちーちゃんがバッグから財布を取り出した。

「はい。ありがとう。五百円ね」

　たこ焼き屋のおじさんが一皿差し出した。すーちーちゃんがお金を払う。受け取るのは竜太郎君。早速、蓋を開ける。たこ焼きは全部で六個。

「一人二個ずつよ」

　すーちーちゃんが仕切る。三人は立ったまま、楊枝でたこやきを突き刺す。竜太郎君がたこ焼き一個をまるごと口の中に放り込んだ。

「あっちっち」

　竜太郎君の口のたこ焼きは、満月になったり、半月になったり、三日月になったりしている。

「変なことしないの」

　すーちーちゃんが叱る。

「だって。熱いんだもん」

　竜太郎君は、右側のほっぺを膨らませたまま答えた。

「一度に、全部、口の中に入れるからよ。半分ずつ、食べなさいよ」

「だって、お腹が空いたもん」
　また、口からたこ焼きが噴き出ている。今度は、平成新山だ。
「さっさと食べなさい」
　あたしとすーちーちゃんは、たこやきを半部ずつ齧る。すーちーちゃんの八重歯にソースが付着して、黒光りしている。怪しい光だ。あたしたちは二個目に挑戦。
「ちゅう、ちゅう、ちゅう」
　また、変な音がする。ねずみじゃない。竜太郎君が口を膨らませているのだ。
「何しているの。竜太郎」
「たこ焼きの中を吸っているんだい」
　竜太郎君は、今度は、左側のほっぺを膨らましている。
「また、変な食べ方して・・・」と、言いながら、すーちーちゃんも、ちゅう、ちゅう、ちゅうと音を立てている。やっぱり、血は争えない。姉弟だ。
「なんか、つい、吸っちゃうんだね」
　すーちーちゃんは笑った、八重歯に付いていたソースは消えていて、元の通り、歯は白く光っていた。あたしもすーちーちゃんや竜太郎君の真似をして、たこやきの中身を吸ってみたけれど、どうも食べた感じがしない。やはり、たこ焼きは噛んだ方がいい。たこ焼きは白い皿から全てなくなった。黒いソースだけが、たこやきがあった証拠を示している。
「さあ、花火を見に行きましょう」
　すーちーちゃんが先頭に立つ。
「僕が一番だい」
　竜太郎君が走る。ただ、走った先は花火の観覧会場ではない。そのずっと手前のテントの前だ。そこではジュースを販売していた。
「お姉ちゃん。喉が渇いた」
　竜太郎君が手招きしている。
「ホント、あんたは世話がやけるんだから」
　すーちーちゃんは、再び、財布を取り出した。ジュースなんて、自動販売機やコンビニで売っているので、珍しくはないけれど、お祭りの時は、いつもと違う、ひと回り大きな容器で売っている。なんだか、美味しく感じる。小学生のあたしたちでは、とても一人では飲めない量だ。
「何にする、竜太郎」
「オレンジ。いや、メロンソーダ。いや、グレープ。コーラもいい」
「ひとつにしなさい」
「じゃあ、メロンソーダ」
「メロンソーダをひとつください。ストローは三本をお願いします」
「はい」
　縦じまのユニフォーム姿のお姉さんが返事をした。すーちーちゃんがお金を払い、竜太郎君がジュースを受け取る。

「わーい」
　竜太郎君がストローに吸いつく。あたしも咥える。残り一本をすーちーちゃんが吸った。三人の喉が勢いよく上下する。一挙に、ジュースの容器が軽くなった。
「ぶくぶくぶく」
　泡の音がする。三人が互いに目を合わす。
「竜太郎。なんで、吹いているの？」
　すーちーちゃんがストローをはずした。竜太郎君も口からストローをはずした。
「だって、ジュースが残り少なくなったから、吹いたら、量が増えるかもしれないから」
「増えるわけないでしょ」
　竜太郎君の予想通り、ジュースはあっと言う間になくなった。あたしとすーちーちゃんは、ストローから口を離した。それでも竜太郎君はまだ、ジュースの器を持っている。
「ずーずーずー」
　強烈なバキューム音だ。あたしとすーちーちゃんが竜太郎君を見る。竜太郎君は器から手を離し、ストローの吸引力だけで、重力に打ち勝っている。竜太郎君は、両手を水平に上げ、ポーズを決める。
「何やってんのよ。バッカみたい」
　すーちーちゃんは冷たく言い放つと、歩きだした。あたしも続く。
　「お姉ちゃん。待ってよ。吸う力の練習を.しているんだから。お姉ちゃんだって、毎日、やってるんじゃない」
　竜太郎君の声を無視して、すーちーちゃんは進む。あたしは、すーちーちゃんと竜太郎君の間に立って、おろおろしながら、すーちーちゃんの背中とジュースの紙箱に吸い付いている竜太郎君の顔を見比べていた。
「あっ、きれい」
「ホント」
「すげえや」
　夜空に燦然と輝き、消えていく花火。あたしたち三人は、芝生広場に座ったまま、眺めている。
「もっと近ければいいのに」
　あたしはボソッと呟いた。
「じゃあ、行ってみる」
　竜太郎君が立ち上がった。
「えっ。どこへ行くの。竜太郎君」
　あたしは思わず尋ねた。
「もっと花火の近いところ」
「やめなさい。竜太郎」
　すーちーちゃんが止める。

「お姉ちゃんたちも行こうよ」
「もっと、近くで、花火が見えるのだったら、あたし、行ってもいいよ」
　あたしも、竜太郎君に続いて、立ち上がった。しょうがないなあ、という顔でっすーちーちゃんも立ち上がる。浴衣のお尻に着いた芝生を払う。
「じゃあ、さやかちゃん。ちょっと目を瞑っていて。あたしがいいと言うまで、目を開けちゃだめよ」
　すーちーちゃんは何をする気だろう。でも、近くで花火が見られるのであればいい。それならばあたしはすーちーちゃんの言うことに従う。
体が何かの上に乗った。目を開けちゃいけないけど、触るのはいいだろう。何だか、動物の毛のようだ。でも、座り心地はいい。座布団か。足が浮いた。顔に風が当たる。気持ちいい。火薬の匂いがしてきた。大きな音も間近に聞こえる。
「もう、いいよ」
　すーちーちゃんの声がした。あたしは目を開けた。目の前には巨大な光が開いていた。でも、すぐに、パチパチパチの音ともに、下に落ちていく。すごい光景だ。ほんとに、近づき過ぎるくらい、花火が近い。その側で、
「ほら、やっぱり近い方がきれいじゃないか」
と、竜太郎君の自慢する声が聞えるけれど、姿は暗くて見えない。
「あれ、すーちーちゃんは？」
「ここよ。心配しないで」
　あたしはすーちーちゃんの背中に乗っているようだった。まさか。夢だろ。
「もう、いい？」
　すーちーちゃんが尋ねてきた。
「うん。ありがとう」
「もう少し、いようよ」
　竜太郎君がダダをこねた。
「あんまり長くいると、花火に当たっちゃうよ。そうなっても知らないから」
　すーちーちゃんの言葉に、「ちぇっ」と竜太郎君が舌打ちをした。
「じゃあ、また、さやかちゃん、目を瞑っていて」
「はい」
　あたしは、また、目を瞑った。瞼越しに、花火の光と火薬の匂いがどんどんと遠ざかっていくのがわかった。変わりに、観客の歓声が近づいてきた。
「はい。もう、目を開けてもいいよ」
　すーちーちゃんの声がした。あたしが目を開けると、さっき、座っていた場所だった。
「面白かった？」
　すーちーちゃんがいたずらをした時の目で、あたしに尋ねてきた。
「うん。面白かった」
　あたしは、どうして、目の前に花火が見えたのかは、あえて尋ねなかった。魔法なのか、手品な

のか、わからない。でも、真近で花火が見えたことは、あたしの網膜を通じて、あたしの脳の中に刻み込まれている。また、火薬の臭いも染みついている。まだ、花火は打ち上げられている。
「もう一回、行こうよ」
　竜太郎君がすーちーちゃんの裾を引っ張っている。
「もう、お終い」
　冷たく言い放つすーちーちゃん。
「ちぇ」
　ふてくされる竜太郎君。
「これは、どう？」
　あたしは、袋から線香花火を取り出した。それを目ざとく見つけた竜太郎君。
「やろうよ。やろうよ」
「でも、こんな場所で、花火をしてもいいのかな」
　あたしは自分が提案したくせに、否定的な意見を言った。
「いいんじゃない」
　すーちーちゃんが応援してくれた。あたしたちは、広場の隅に移動し、輪となって、線香花火に火を点けた。
　ぱちぱちぱち、ぽと。
　夜空を彩る花火の迫力には負けるけれど、目の前で見られる線香花火は、なんだか自分専用の花火で嬉しい。空の上と地面との両方での花火大会。あたしとすーちーちゃんと竜太郎君の顔を両方の花火の光が照らす。
「うわー、いいな」
いつの間にか、あたしたちの周りを花火を見に来た人たちが取り囲んでいる。
「花火だ、花火だ」
「花火をやろうよ」
　あたしたちは周囲のみんなに線香花火を配る。みんなは線香花火に火を付けながら、時に、空に輝く、花火を眺める。花火会場全体が花火の光に照らされる。
「よかったね」
「うん。また来ようよ」
　あたしたち三人は、まだ、花火で輝いている会場を後にして、家に帰った。でも、ほっぺは赤く染まっていた。

六　虹の九月

父親学級の帰る途中だった。
「ちょっと、あっちに行ってみない」
あたしはすーちーちゃんを誘った。道草だ。
「いいよ」すーちーちゃんは二つ返事だ。「それでどこに行くの」
「公園よ」家の近くの中央公園だ。近所の子どもたちの遊びの中心だ。家の近所では、広い場所がない。家の前の道路では、車が通る多恵、その度に、遊びをやめて、道の端に寄らないといけない。その点、中央公園では、野球やサッカー、バスケットボール、ドッジボール、バドミントン、鬼ごっこなど、何でもできる。公園に着いた。
「もういっぱいだね」
「いっぱいだね」公園では、同級生たちが、所狭しと遊んでいる。あたしたちは公園のベンチに座った。
「あっちに行かない」すーちーちゃんが右手で指を指した。池だ。池の土手だ。
「うん。行こう」
あたしたちは公園から池に向かう。
「広いね」
「広いね」
池の土手の上には道があり、一周できる。お年寄りたちが散歩をしている。風が吹いてきた。
「気持ちいいね」
「気落ちいいね」
あたしたちは土手の草の上に座った。土手の反対側では、男の子二人が、虫取り網を肩に掛け、自転車に乗って走っている、競争しているのか、かなり飛ばしている。こちらの方に近づいている。
「勝負だ」「いいとも」男の子の声が聞こえた。自転車はあたしたちの前を猛スピードで通り過ぎた。
「ガチャン」大きな音だ。自転車同士がぶつかった。「あっ」あたしたちの驚きの声の中で、一方の自転車は土手の草むらの方へ、もう一方の自転車は土手の池の方へ落ちていく。
「ザザン」「ドボン」二つの大きな音。
「池に落ちたわ」「ほんと」
あたしたちは池の堤防の方に降りていく。
「助けて」男の子が叫んでいる。周りを見渡す。運悪く、散歩をしている大人はいない。あたしはどうすることもできなくてただ見守っていると、突然、すーちーちゃんがひざまづいて、顔を池に近づけた。
「ぶおおおおおおん」ポンプのような音がする。その音とともに、池の水が減っていく。池の水が減るとともに、すーちーちゃんの体も膨れていく。
「大丈夫か」草むらに落ちた男の子が池の土手の方に降りてきた。

「ぶおおおおおおん」ポンプの音が続く。
「あれ」手を振り上げて助けを読んでいた男の子が池の中で立っていた。
「なんだ。足が着いたぞ」男の子は池から首を出していた。
「今、助けるぞ」草むらに落ちた男の子がバシャバシャと池の中に入っていく。
「グビ」すーちーちゃんがしゃっくりをする。何かが喉に詰まったみたいだ。あたしはすーちーちゃんの背中を叩いた。
「ゴボ」口から出てきたのは鯉だ。池の鯉だ。大きな鯉だ。
「わー。水が増えた」男たちの叫び声がする。おへそまでに減った水が胸までにせりあがっていた。鯉と一緒にすーちーちゃんが飲み込んだ池の水が吐き出されたのだ。
「すーちーちゃん。がんば」あたしは近くに落ちていた、男の子たちの虫取り網を持つと、すーちーちゃんの口先に浸けた。再び、鯉が吸い込まれないようにするためだ。
　すーちーちゃんの体がぶくぶくと膨れる度に、ずんずんと池の水が減っていく。水位は男の子たちのおへそまで下がった。
「もうだめ。グビ」すーちーちゃんの体は二倍以上に膨らんでいる。
「早くして」あたしも限界だ。虫取り網には何匹もの鯉が入っている。鯉と網と一緒にあたしもすーちーちゃんに飲み込まれそうだ。男の子たちは、ザボン、ザボンと音を立てながら、土手の上に自転車を持ちあげた。
「もう大丈夫よ」あたしはすーちーちゃんに声を掛けた。
「ぶわああん」
　すーちーちゃんの口から池の水が勢いよく噴き出した。まるで噴水だ。水はそのまま空高く吹き上がる。急に、空が暗くなった。しかも、池の上だけだ。すーちーちゃんが吐き出した水が黒い雲になったのだ。雷が鳴る。
「きゃあ」あたしは叫んだ。すぐに雨が滝のように降って来た。しかも、雨だけではない。すーちーちゃんに吸い込まれた鯉や鮒、どじょうにザリガニなども降って来た。鯉の滝登りならぬ、鯉の、池の生物たちの滝降りだ。池がお帰りなさいと迎えている。魚たちは、訳がわからいまま、目を点にして、元の住処に戻って来た。しかも、雨は、不思議なことに、池の上だけに降っていた。周辺には降っていない。雨がやんだ。膨れ上がっていたすーちーちゃんの体は元の姿に戻っていた。
「ふう」最後の池の水を出したのか、膝まづいていたすーちーちゃんが立ち上がった。
「ありがとう」「助かったよ」
　自転車の二人の男の子は、草まみれと濡れた自転車を押しなが、お礼を言いに近づいてき。すーちーちゃんは土手に座り込んだままだ。あたしは男の子たちに虫取り網を返す。
「助かってよかったね」代わりにあたしが答える。
「じゃあ」
「じゃあ」
　男の子たちは網を肩にかつぎ、草まみれと水に濡れた自転車に乗って、今度は、競争すること

なく、ゆっくりと帰って行った。すーちーちゃんはかなり疲れているみたいだ。
「帰ろう」
「うん」
「あれ、虹よ」池の端から端まで半円の光の輪の端ができている。
「きれいね」
「うん。きれいだね」
　二人はの土手を降り、公園の横を通り、神社の前に来た。
「さよなら」
「さよなら」
　すーちーちゃんは神社の中に入っていく。あたしはその後ろ姿を見送った。すーちーちゃんは不思議な子だ。池の水をあんなに飲めるなんて。でも、そのおかげで、男の子が助かったんだからいいか。それに、鯉の滝降り？に、虹も見えた。でも、やっぱり変だ。あたしは納得したような、納得していないような気落ちで家に帰った。

七　秋祭りの十月

「ドンドン、ドンドン」「チンチン、チンチン」
　太鼓と鉦の音がどこからか聞こえる。秋のお祭りだ。朝早くから、祭りの担当の大人たちや子どもたちが軽トラックに乗り込んで、近所の大きな家や電気店、自転車屋、コンビニ、スーパーなどの前で、獅子舞を踊り、太鼓を叩き、鉦を鳴らしている。その音がだんだんと近づいてくる。神社だ。あたしの家の近くの神社だ。すーちーちゃんの家だ。あたしは靴を履くと、玄関を飛び出した。
「さやか、どこへ行くの？」
　台所の方で、お母さんの声がした。あたしは玄関を開けたまま、
「ちょっと、神社」と答えた。
　神社の境内の前では、軽トラックが止まり、太鼓が鳴り始め、獅子舞が踊りだした。その獅子舞を観客が一重、二重と輪で取り囲む。
　あたしは、大人と大人の間の隙間から獅子舞の踊りを覗く。なんだか、興奮する。思わず、一緒に踊りだしたくなる。ふと、見ると、獅子舞と一緒に踊っている子どもがいる。竜太郎君だ。
「こら、邪魔しちゃだめでしょ」
「いたたたた」
　すーちーちゃんが竜太郎君の耳を引っ張って、輪の中から連れだした。
「いいよ、いいよ」
「踊ればいいんだ」
　おじさんたちが促した。竜太郎君は勝ち誇った顔で、再び、輪の中に入っていく。獅子舞と一緒に踊る。
「あんたたちも一緒に踊ったら」
　獅子舞のおじさんたちが、あたしとすーちーちゃんに声を掛けてくれた。
「ええ、あたしたちですか」
　あたしとすーちーちゃんがお互いに顔を見合す。
「あたしは、ちょっと・・・」と答えようとしたら、
「ええ、踊ります」と、すーちーちゃんの声がして、「踊ろう」とあたしの手を掴むと輪の中に入った。
「負けないぞ」と、竜太郎君が声を上げた。
「どうせやるなら、獅子舞がいいだろう」
「もうひとつあっただろう」と、おじさんたちが獅子舞を貸してくれた。その獅子舞に、あたしとすーちーちゃんと竜太郎君が入る。
「僕が、一番前だい」
　竜太郎君が獅子のお面を持とうとした。
「あんたは、ちっちゃいから、ダメ」と言って、すーちーちゃんが先頭に立つ。
「チェッ」と言いながら、「じゃあ、尻尾がいい」と一番後ろにはいった。残ったのが真ん中。

あたしがそこに入る。本当なら、獅子舞は二人だけど、あたしたちは小学生なので、三人ですることにした。
「じゃあ、いくぞ」
　おじさんたちが笛や太鼓を鳴らし始めた。あたしは、すーちーちゃんの腰に手を添えて、すーちーちゃんの動きに合わせる。竜太郎君も、あたしの腰に手を添えているが、時々、飛び跳ねているみたいだ。獅子の中は、真っ暗で、何も見えない。ただ、すーちーちゃんの動きに合わせるだけだ。外から見ているのと、実際に踊るのは違う。
　息が激しくなってきた。足がもつれる。もう、何時間も踊っているみたいだ。この踊りは永久に続くのか。最初、腰を曲げていたが、すーちーちゃんの腰を持つ位置が高くなっていく。あたしの背筋がまっすぐになった。
　この状態は、すーちーちゃんが地上から浮かんでいることになる。そんな馬鹿な。でも、すーちーちゃんの腰の位置は、あたしの顔の前だ。中が暗くてよく見えないけれど、すーちーちゃんが浮かんでいるか、それとも、すーちーちゃんの足が伸びただけなのか。いや、よく見ると、すーちーちゃんの足が浮かんでいる。あたしの頭の中も真っ暗になった。ようやく笛や太鼓が鳴り終わった。拍手喝さいだ。あたしは疲れ果てて、その場で蹲った。
「大丈夫？」明るくなった。獅子舞の布が外された。すーちーちゃんの顔が見えた。
「よかったぞ」
「獅子が空を舞うとは思わなかった」
「あんな芸当、どうやってできるんだ」
　と、次々と.大人たちから驚きとお誉め言葉を頂いた。
「喉が渇いたろう。ジュースでも飲みな」
　獅子舞のおじさんのうちの一人が、三本、ジュースとお菓子を渡してくれた。
「わーい」竜太郎君が無邪気に喜んでいる。　あたしたちは、神社の裏側に置いてあるベンチに座った。
「楽しかったね」
　すーちーちゃんは上機嫌だ。
「ジュースやお菓子をくれるんだったら、毎日でも踊るよ」
　竜太郎君がジュースを飲みながら、お菓子をほおばる。あたしは、疑問点を口にした。
「おじさんたちが、獅子が宙に浮いていたって、本当？」
「ねえちゃん、羽を使って飛んでいたんだよ」
　竜太郎君が答える。
「ボコ」
「イテ」
　すーちーちゃんが竜太郎君の頭を殴る。
「そんなこと、出来るわけがないじゃないの。適当にジャンプしていただけよ。そんなことより、このお菓子美味しいね」

すーちーちゃんも、竜太郎君と同様に、ジュースを飲みながら、お菓子を食べている。すーちーちゃんは、本当に不思議な子だ。竜太郎君もだけど。姉弟だから当たり前か。

八　遠足の十一月

　みんながバスに乗り込む。今日は遠足だ。行き先はM山。あたしたちの小学校からバスで約二十分。学校からも見える。頂上の展望台からは、海や市内全域が見渡せる。芝生広場や遊具もあり、一日中遊べる場所だ。
　これまで、あたしはお父さんやお母さんに連れられて、お弁当を持って、遊びに行ったことがある。アスレチックフィールドや市内で一番の滑り台などもある。何が一番なのか、よくわからないけれど。
　バスが坂道を登っていく。左手には市民病院が、右手にはお墓と老人ホームが見える。全然違う施設だが、何かが通じているような気がする。
「あたし、ここに来たことがある」
　ふいに、すーちーちゃんがしゃべった。
「えっ、ほんと。誰か、入院していたの？」
「ううん。お墓の方」
　すーちーちゃんは転向してきたばかりだ。そう言えば、どこから来たのか聞いていなかった。お墓があるのならば、この市の出身なのか。
「ううん、そうじゃないの。パパやママの仕事の関係よ。あたしも一緒に着いてきただけ」
　すーちーちゃんが説明してくれた。すーちーちゃんのお父さんは神主で、お母さんは巫女さんだから、何か関係があるのだろうか。
　あたしは、三月、お盆に、九月、お正月の年四会、お墓参りに行っている。お父さんやお母さんに連れられて、あたしが生まれる前に死んだおじいちゃんのお墓だ。そのお墓は山を切り開いたところにあり、何百、いや何千もの、同じようなお墓が建てられていた。
　お墓参りに行くのはいいのだけれど、会ったこともないおじいちゃんのお墓の前で、手を合わせても、おじいちゃんの姿は目に浮かんでこない。ちょっと複雑な気持ち。だから、形だけ、手を合わせている。
　ここのお墓は、おじいちゃんが眠っている場所よりも古い。背の高いお墓や先がとんがったお墓、苔が生えたお墓、今にも崩れそうなお墓などが、寄り集まっている感じだ。
　バスはお墓の横を通り過ぎると、山道をくねりながら登っていく。道路沿いに家が立っている。ここに住めば見晴らしがいいだろうけれど、学校に通うのは大変。行きは楽々、帰りは疲れる、だ。
　座席から振り返ると街のビルや家が小さく見える。あたしの横ではすーちーちゃんがすやすやと眠っている。
「着きましたよー」
　先生の声であたしたちはバスを降りた。あたしたちは先生の後を続いた。階段を登ると、緑が広がっていた。芝生広場だ。
「わー」
　清水君たちが走り出そうとした。

「まだですよ」
　先生からは日程が示された。まずは、古墳の見学だ。この山には多数の古墳がある。石を山のように積み重ねたものだ。昔の人のお墓だ。バスで登ってきたお墓とは違う。
「さあ。ここに亡くなった人を葬ったのよ」
　石積みの古墳に横穴があった。みんな、中を覗く。暗い。やんちゃな清水君も直ぐには中に入ろうとしない。
「さあ、中に入りますよ」
　先生の指示で、二人一組になって、お墓の中に入っていく。あたしはすーちーちゃんと同じペアだ。
　次々と、クラスメイトたちが入っては、出ていく。笑っている顔もあれば、真っ青な顔もある。あたしたちの番が来た。すーちーちゃんが平気で入っていく。
「すーちーちゃん、怖くないの？」
　あたしは思わず声を掛ける。
「怖くないよ。さやかちゃんもいらっしゃい」
　すーちーちゃんが手招きをする。魅力的な八重歯が暗闇の中できらりと光る。人間懐中電灯だ。何か目に見えない力に引っ張られるかのように、あたしは穴の中に入った。
「まっ暗ね」
「そうよ。まっ暗ね」
　あたしは心細いので、すーちーちゃんの手を握る。あったかい。穴の中がひんやりしている分、すーちーちゃんの手がより一層温かく感じる。
「あたし、前に来たことがある」
　すーちーちゃんがぽつりと言った。すーちーちゃんは古墳に興味があるのか。それとも、お父さんやお母さんに連れられて来たのか。
　暗闇に目が慣れてきた。うっすらとだが、石積みが見えてきた。昔の人はすごい。何人いや何十人、何百人もの人が、機械を使わずに、人の力だけで、石を積み重ねていったのだ。すーちーちゃんの手が離れた。その時、奥から何かが飛んできた。
「きゃあ」
　あたしは大声を上げ、穴の中から飛び出た。
「鈴木、大丈夫か」
　座り込んでいるあたしに清水君がかがみこんで来た。
「何かが飛んできたの」
「こうもりだよ」
「こうもり？」
「うん。こうもりが穴の中から飛んでいったよ」
「なんだ。こうもりか」
　と、言ったものの、苦手だ。こうもりは、近くの神社、そう、すーちーちゃんが住んでいる神社にもいる。薄暗くなると、あたしの家の電信柱の周囲を飛んでいる。あたしはこうもりを見

ると、すぐに家に帰り、部屋のカーテンを閉める。あたしの方が体は大きいことはわかっているけれど、こうもりに連れて行かれるんではないかと怖いのだ。
　そう、こうもりと言えば、すーちーちゃんはどこ？あたしは、すーちーちゃんを置いてきぼりにして逃げたんだ。
「すーちーちゃんは？」
「龍野子なら、あそこだよ」
　清水君が指差した先にすーちーちゃんは立って、葉が生い茂った高い木を見上げていた。
「お腹減ったね」
「うん。お腹減った」
　あたしたちのクラスは、芝生の端の滑り台に近い場所に陣取った。あたしとすーちーちゃんは横に並んだ。
　あたしはお弁当を開ける。海苔の巻いたおにぎりが二個、黄色い卵焼きにオレンジ色のウィンナー、茶色いミニハンバーグ、赤いミニトマトに緑の野菜、色とりどりだ。あたしがお母さんに注文したものだ。
「おいしそうね」
　すーちーちゃんが横から覗きこんだ。
「ひとつ食べる？」
　あたしはおにぎりを差しだそうとした。
「ありがとう。でも、あたしはあたしの分があるから」
　すーちーちゃんもバッグからお弁当を取り出した。
「ほら」
　すーちーちゃんのお弁当の中身は、赤いトマトに、赤いイチゴ、赤いピーマンに、赤いケチャップ、そして、赤いマグロの刺身に、赤く血もしたたらんばかりのレアなお肉。白いごはんの上にはピンクのでんぷんが乗っている。まさに、赤づくしだ。そう言えば、お弁当箱も赤、お箸も赤、お弁当を入れた袋も赤だ。
「いただきます」
　二人合わせて、ごはんを食べ始めた。あたしの口の中には、様々な色の食べ物が入り、すーちーちゃんの口の中には、赤一色が入る。あんまり急いで食べたものだから、口の中がいっぱいだ。慌ててお茶を飲む。ふと、すーちーちゃんのお茶を見る。真っ赤だ。紅茶なのか、トマトジュースなのか。すーちーちゃんは目を細めて、赤を吸収していた。
「すーちーちゃん、その飲みのものは、トマトジュース？」
　あたしは尋ねた。
「の、ようなもの」
　すーちーちゃんはほっぺを真っ赤にして、ちゅうちゅうしながら飲みものを啜る。口角からは溢れ出た赤い液体がたらりと落ちる。その液体を長く伸びた真っ赤に染まった舌がペロリとすくった。ペコちゃんだ。不二家のお菓子のトレードマークだったっけ。すーちーちゃんが笑った。

魅力的な八重歯は、今は赤く染まっている。
　お弁当が終わった。午前中は、古墳の見学や植物・小鳥を実際に見て、観察をした。午後からは自由時間だ。芝生広場から歩いて十分のところに、はにわ公園がある。
　はにわの形をした滑り台やシーソー、うんてい、ターザンごっこなどの遊具があるから、はにわ公園と名付けられた。古墳群のある山だから、はにわが似合う。
「すーちーちゃん。行こう」
「うん」
　あたしたちは、はにわ公園に着いた。もう既に、山崎君や柴野君、清水君たちが遊んでいた。
「鈴木、遅いじゃないか」
　清水君が滑り台から滑ってきて、最後の所で大きくジャンプした。
「みんな、何しているの」
「鬼ごっこだよ。ルールは、このはにわ公園から外に出たらいけないんだ。鈴木も龍野子もやろうよ」
　ルールは、遊具の設置場所には芝生が植えてあり、周囲は垣根があった。垣根の外側は道だった。道に出たらアウトだ。
「すーちーちゃん、どうする？」
「いいよ」
「よし、決まりだ。みんな。鈴木と龍野子も鬼ごっこに参加だ。よし逃げろ」
「待って。鬼は誰？」
「山本だよ」
「どこ？」
「滑り台の上だよ」
　はにわの滑り台の上には山本君がいた。今からこちらに滑り降りてきそうだ。
「逃げようよ。すーちーちゃん」
「うん」
　あたしたちはターザンに向かう。ひもにぶらさがりアアアーンと声を出せば、地面につかずに反対側に行ける。
　まずは、あたしが飛び乗った。両手で自分の体を支える。痛い、手がちぎれそうだ。地面に足がつきそうだ。でも、なんとか、向こう側についた。急いで、滑車をすーちーちゃんがいる側に戻す。鬼の山本君が滑り台から降りて、ターザンに向かっている。すーちーちゃんが危ない。
「早く。すーちーちゃん」
　すーちーちゃんは、ターザンのひもにぶらさがる。山本君の手が伸びる。滑車が動く。するするする。山本君の手は大きく空振り。すーちーちゃんは滑り出した。でも、地面に足がつきそうだ。足がつくと、鬼になる。
「すーちーちゃん。足が着きそうよ」
　あたしが大声を上げる。すーちーちゃんは、にこっと笑って、魅力的な八重歯を剥き出しにす

ると、ロープを噛んだ。そして、歯だけで、するするとロープを登っていく。
「すごいな、龍野子」
　運動神経抜群の清水君も口を開けたまま、見つめるだけだ。すーちちゃんはロープの一番上まで体を上げ、ふわりと台の上に降りた。まるで鳥が飛んだかのようだ。でも、ロープは山本君の元に戻った。鬼の山本君はロープにぶら下がって、こっちに向かって来る。
「すーちーちゃん、逃げよ」
　あたしはすーちーちゃんの手を握った、だけど、すーちーちゃんは全てをわかりきっているかのように微動だにしない。山本君がこっちに向かって来る。到着しそうだ。捕まる。その時だ。
　ギリギリギリギリ。
　大きな音がしたかと思うと、ロープが真っ二つに切れかかった。ロープを見つめる山本君。急いで手を伸ばし、上の方のロープを掴もうとするが、地球が、地面が、山本君を愛していた。山本君は、そのまま、お尻ごと地面に不時着した。残念ながら、山本君はパラシュートを広げていなかった。そのままお尻から煙をだした。
　あっちっち。
　山本君は鬼であることを忘れて、水、水、水と叫びながら手洗い所に向かう。火事の一歩手前なのか、土埃なのかわからないけれど、お尻からは、カチカチ山のたぬきのように、白い煙を出している。
「さあ、逃げよ」
　すーちーちゃんにせかされて、あたしは別の場所に逃げた。恐るべきすーちーちゃんの八重歯。
　あたしとすーちーちゃんは、鬼の山本君から逃げて、展望台にやってきた。ここは、この山で一番高い所だ。展望台から眺めれば、海が見え、街が広がっている。
「ここまで逃げれば、大丈夫よね」
　あたしはすーちーちゃんに話しかけた。すーちーちゃんも頷いた。その時だ。
「おねえちゃん」
　どこからもなく声がした。どこかで聞いた声だ。でも、思い出せない。横を向いた。すーちーちゃんの顔が引き吊っている。
「ごめん、ちょっと待っていて。ちょっとトイレ」
　すーちーちゃんがあたしに微笑んだ。でも、目は笑っていない。怒っている。すーちーちゃんは一人で、展望台の階段を下りていく。あたしは街の景色を眺める。残念ながら、ここからはあたしの家は見えない。家は反対側の南の方だ。この市の方角はわかりやすい。北が海で、南に山がある。どこかに行くにも、海の方か、山の方かある程度の目安をつけておけば、迷うことはない。その海には島々が浮かんでいる。その島の間を、船がゆっくりと行き交う。船は動いているのだろうが、遠くから見ると、ピンで海に突き刺ささっているかのようだ。時間が止まっている。すーちーちゃんも時間が止まったかのように、戻って来ない。
「なんで、あんたがいるの」
「おねえちゃんだけ、ずるいよ」

「あたしは学校なの。あんたは保育所でしょ」
「今日は休みだよ」
「ずる休みでしょ」
「保育所は義務教育じゃないから、休んでも大丈夫」
「そういう問題じゃないの。あんたがここにいることが問題なの」
「姉弟は、仲良くしなさいって、ママがいつも言っているんじゃないか」
「今は、そういう時じゃないの。早く帰りなさい」
「いやだ。ねえちゃんと一緒にいる。僕も鬼ごっこがしたい」
「見ていたのね」
「見ていたよ」
「ママに言いつけてやる」
「ねえちゃんだって、本性を出していたよ。ママに言うよ」
「あんたに何がわかるの」
　すーちーちゃんが誰かと話をしている。相手は弟の竜太郎君の声に似ている。でも、竜太郎君は今頃、保育所のはずだ。お母さんと一緒に、来ているのか。
　あたしは展望台を下り、「すーちーちゃん、どこ？」と二人の声のする方を探す。
「竜太郎。もう、帰りなさい」
「いやだよ。あっかんべー」
　バサバサバサと羽ばたく音がしたかと思うと、木の陰にすーちーちゃんが立っていた。
「すーちーちゃん。誰と話をしていたの？」
　あたしが尋ねても、「うううん。誰とも。鬼が来ないか見張っていたの」と答えるだけ。
「さあ、みんなのところに戻ろうよ」
　すーちーちゃんが山道を駆けていく。あたしも続く。バサバサバサ。再び、羽の音がした。あたしが音のする方に顔をやると、黒い鳥のようなものが飛んで行った。
「あれ、何？」
　あたしが尋ねても、すーちーちゃんは素知らぬ顔で、「さあ、急ぎましょう」とどんどんと坂道を下りていく。
「待ってよ」あたしはすーちーちゃんの後ろから離れないように後を追った。
　遠足は終わった。
「さあ、バスに乗りなさい」
　先生の合図であたしたちはバスに乗り込む。座席は来た時と同じ場所だ。すーちーちゃんが窓際で、あたしは通路側だ。
「おい。お前たち、どこに隠れていたんだよ」
　清水君があたしたちの横を通りながら尋ねた。
「展望台よ」
　あたしが答える。

「展望台か。展望台は境界外だよ」
「そうなの。知らなかったわ」
「まあ、いいよ。もう、終わったことだし」
　清水君が立ったままだ。
「清水、早く座れよ」
　山本君が清水君の背中を押す。
「おっ、悪い。じゃあ、またね」
　清水君や山本君は一番後ろに座った。バスが動きだした。はにわ広場で鬼ごっこをしたので、体が疲れた。バスの揺れがゆりかごのようにあたしの眠りを誘う。隣のすーちーちゃんを見る。すーすーすー。寝息をかいでいる。あたしの瞼もその誘惑に負けた。しばらく眠ったのだろうか。
　コン。コン。コン。コン。
　音がする。あたしは目を開けた。何か窓にいる。その何かが窓を叩いている。何かは真っ黒な鳥、じゃなく、コウモリだ。
　あたしは思わず声を出しそうになったが、唾を飲み込み、コウモリを凝視した。あたしの異変に気付いたのか、すーちーちゃんが目を覚ました。まずは、あたしの顔を見て、視線の方向の窓に目をやった。そして、ふんと、怒ったように、片手でバンと窓ガラスを叩いた。あまりに強烈な平手打ちだったので、コウモリはガラス越しの振動で窓から落ちた。でも、態勢を立て直すと、再び、窓に近づいてきた。
「しつこいんだから」
　すーちーちゃんは、もう一度、窓ガラスを叩いた。そして、何もいないかのように、無視して、目を瞑った。　コウモリはあきらめたのか、羽の先の手で目のあたりを触った。まるで、あっかんべーをしているみたいだ。そのまま、バスから離れて、学校の方角へ飛んでいった。

九　クリスマス会の十二月

今日は、あたしが入っている子供会のクリスマス会。小学一年生から六年生までが小学校の体育館に集まる。あたしの子供会は、全員で三十人程度。もちろん、すーちーちゃんも会員だ。あたしは家を出て、学校の側の神社に向かう。すーちーちゃんの家だ。神社の社殿の前に立ち、鈴を鳴らす。

二礼二拍手一礼。

今月のお小遣いがなくなってしまったので、一円玉だけを賽銭箱に投げ入れた。ギーという音がして、社殿の扉が開いた。すーちーちゃんのお母さんだ。真っ黒のドレスを着ている。いつ見ても、妖艶だ。思わず吸いこまれてしまいそうな雰囲気を持っている。

「さやかちゃんね。呼びに来てくれて、ありがとう。ちょっと待っていてね」

お母さんは社殿の中に引っ込んだ。しばらくして、再び、社殿の扉が開く。中から出てきたのは、すーちーちゃんだ。真っ白な服を着ている。肌が白いので、全身がまっ白に染まっている。

「さあ、行きましょう」

すーちーちゃんが社殿から下りてきた。

「僕も行く！」

元気よく飛び出してきたのは、弟の竜太郎君だ。

「あんたは、小学生じゃなく、保育園児でしょ。今日は、小学生だけよ」

すーちーちゃんが言い放つ。

「だって、ママがいいって言ったもん。ほら、このチラシに、「小学生以下の、弟や妹も参加可能です」、って、書いてあるよ」

竜太郎君がポケットから、何回も折られたクリスマス会のチラシを取り出した。すーちーちゃんは、チラシも見ずに、「なら、いいよ」と言うと、すたすたと歩き出した。

「やったあ」歓声を上げた竜太郎君は、すーちーちゃんの前に駆けだした。

取り残されたあたしは「待って」と叫んで、すーちーちゃんの横に並んだ。

クリスマス会が始まった。司会者が舞台の上から、挨拶している。あたしたちは、床の上に、体育の座りをして、司会者のお母さんから、今日のイベントの内容を聞いている。

まずは、鬼ごっこだ。体育館を全部使っての鬼ごっこ。最初、鬼は一人だけど、鬼にタッチされると鬼と手をつなぐ。鬼がどんどん増えていき、横に広がるわけだ。

「鬼になりたい人、手を挙げて」

運営のお母さんが尋ねた。

「はい」

六年生の堺君が手を挙げた。あたしたちの小学校で、一、二の足の早さだ。気をつけなければ、すぐに捕まってしまう。

「ピー」

笛が鳴った。競技開始だ。

「いち、にい、さん、・・・」
　鬼の堺君が数を数え始めた。十を数え終わったら、動き出す。それまでに、酒井君から少しでも遠くに離れないといけない。みんな、一斉に散らばって、体育館の壁にひっついた。体育館の真ん中では、鬼の堺君が数を数えている。
「くう、じゅう。それ」
　サンタクロースの帽子を被った堺が走り出した。
「きゃあ」
「逃げろ」
　体育館の片隅に固まっていたあたしたちは、散らばる。
「タッチ」
　堺君の声。
「アウト」
　審判員のおかあさんの声。
　まず、狙われたのは、同じ六年生の合田君だった。
「チェ。俺から狙うのか」
「それよりも、早く、みんなを捕まえるんだ」
　審判員がタッチされた合田君に赤い帽子を被せた。
「タッチ」「アウト」「タッチ」「アウト」
　タッチとアウトの声が体育館全体に交互にこだまする。見る見るうちに、サンタクロースが数珠つなぎになる。赤い帽子だらけだ。サンタクロースの鬼たちは、へびのようにくねりながら、あたしたちを追い掛ける。
「タッチ」
　誰かの手があたしの体に触れた。
「アウト」
　審判員が宣言した。あたしもとうとう鬼に捕まった。サンタクロースの仲間だ。へびの仲間は嫌だ。
「はい。手をつないで」
　審判員から声を掛けられ、赤い帽子を被る。残されたのは、すーちーちゃんと竜太郎君だ。鬼が手をつなぐと体育館の端から端まで広がった。すーちーちゃんと竜太郎君を追い詰める。ぐるっと円で、二人を囲んだ。
　竜太郎君があたしに向かってきた。あたしは右手を出した。
「タッチ」
「ガブ」
　竜太郎君があたしの右手を噛んだ。
「痛っ」
「こら」

すーちーちゃんが走って来て、竜太郎君の頭をポカリと殴った。
「いて」
「痛いのは、あんたじゃなくて、さやかちゃんでしょ」
「ごめんなさい。つい、いつもの癖で」
竜太郎君が謝る。
「何が癖よ。バカ。相手を噛んでも、タッチされたことになるのよ」
「ポカリ」
もう一度、すーちーちゃんが竜太郎君の頭を殴る。この間に、すーちーちゃんも鬼にタッチされた。
「ピー」
笛が鳴った。
「全員タッチされたので、サンタクロース鬼ごっこは終了します」
審判員のお母さんが宣言する。
「さやかちゃん。大丈夫？痛くない。本当に、ごめんね」
すーちーちゃんは竜太郎君が噛んだ手を握る。
「あっ、血が出ている」
「えっ、ほんと？」
あたしは右手を見る。うっすらとだが、竜太郎君が噛んだ歯の跡に血がにじんでいる。
「舐めちゃえばいいのよ」
すーちーちゃんがあたしの手を掴んだ。
「ええ？舐めるの？ばっちいよ」
「ばっちくないよ。自分の血だもの。それに、栄養素の塊りだよ」
「でも・・・」
あたしは怪我をした時、水で洗ったり、消毒したりするけど、自分の血を舐めたことはなかった。それに、血が栄養の塊りという発想はなかった。
「大丈夫よ」
すーちーちゃんは、いきなり、あたしの右手を掴むと、舌でペロリと舐めた。
「ずるいよ、ねえちゃん。ねえちゃんだけ、いい目して」
あたしの手を噛んだ犯人の竜太郎君が目ざとく見つけ、怒っている。何がいい目なのか。あたしは、人に手を舐められたのは初めてだから、何だか恥ずかしいような、気持ちのいいような気持ちだ。
「どう？」
あたしの手を舐めたすーちーちゃんがあたしの顔を上目づかいに見る。
「どうと言われても・・・・」
眼が合った。何だか気恥ずかしい。
「これで、大丈夫。血は止まったから」

　すーちーちゃんはあたしの手を離した。
「ありがとう」
　あたしはすーちーちゃんの唾液がついた手を元に戻した。手を服で拭いた方がいいのか、それともこのまま乾かせばいいのか、迷った。でも、手を振って乾かすことにした。手を服で拭くなんて、すーちーちゃんに悪い気がしたからだ。
　クリスマス会もいよいよ終わりに近づいた。
「さあ、皆さん。プレゼント交換の時間です。自分のプレゼントを出してください」
　司会者の声で、それぞれが体育館の隅に置いてある袋から、包装紙に包んだプレゼントを持ってくる。あたしのプレゼントは、文房具セットだ。すーちーちゃんに尋ねる。
「プレゼントは何にしたの？」
　すーちーちゃんは笑って、「ひ・み・つ」と答えた。
「輪になってください」
　司会者を中心に、輪になる。
「さあ、プレゼント交換しますよ。自分のプレゼントを右隣の人に渡してください」
　音楽が鳴った。クリスマスソングが体育館中に鳴り響く。あたしはあたしのプレゼントをすーちーちゃんに渡した。すーちーちゃんは、あたしのプレゼントを弟の竜太郎君に渡した。次々と回ってくるプレゼント。左から右へと手渡して行く。
「ピー」笛がなった。
「今度は、反対に回してください」
　司会者の合図で、あたしたちは、左から右へとプレゼントを手渡して行く。
「ピー」また、笛が鳴った。今度は、右から左へとプレゼントを手渡す。何回か、笛が鳴り、その度ごとに、プレゼントを渡す方向が変わった。
「ピー」
「今度は、一人飛ばしで、渡してください」
「えええええ」
　参加者からはとまどいの声。
「ピー」
「今度は、二人飛ばしです」
　さらに、訳がわからなくなった。あたしのプレゼントはどこへ行ったのだろう。最初は、あたしのプレゼントを目で追っていたが、目まぐるしく他の人のプレゼントが、人間ベルトコンベアーに運ばれてやってくるので、それどころじゃなくなった。
「ピピピピピ」
　大きな笛の音が鳴った。
「やめてください」
　もう、めちゃくちゃだ。誰が誰のプレゼントかわからない。あたしは、白い包装紙に、ピンクのリボンがついた箱を持っていた。どこかで見た箱だ。隣のすーちーちゃんを見た。

「それ、あたしのプレゼント」
　あたしもすーちーちゃんのプレゼントを見る。
「それ、あたしのプレゼント」
　偶然にも、あたしとすーちーちゃんは、お互いのプレゼントを持っていた。こんなことなら、わざわざゲームをしなくても、お互いに手渡していればよかった。
「さあ、開けてください」
　みんな、その場で、プレゼントを開けた。
「わあ」
　あたしはびっくりした。プレゼントは人形だった。それも誰かに似ている。そう、すーちーちゃんだ。その、すーちーちゃん人形の肩に乗っているのが、竜太郎君だ。
「すごい。似てる」
「ありがとう」
　すーちーちゃんがにこっと笑った。
「自分で作ったの？」
　あたしが尋ねる。
「うん。あたし、人形を作るのが好きなの」
「へえ。芸術家なんだ」
「そんなにえらいもんじゃない」
　照れたすーちーちゃんは可愛い。八重歯がきらりと光る。
「その人形は、夜中に動き出すんだぞ」
　竜太郎君があたしたちの会話に入って来た。
「動くわけがないじゃないの」
　すーちーちゃんが竜太郎君の頭にグーを落とした。
「いて」
　竜太郎君が頭を撫でている。
「それに、その人形のエサは、人間の血だから」
「ホント？」
　あたしは人形を突き出しながら、聞き返した。
「ホントなわけないじゃない」
　すーちーちゃんがもう一度、竜太郎君の頭にグーを落とした。
「いて」
　再び、竜太郎君が頭を撫でる。
「その人形、あたしだと思って、大事にしてね。さやかちゃんのプレゼントは何？」
「あたしのは、自分で作ったんじゃなくて、お店で買ったの」
　すーちーちゃんが包装紙を開ける。
「あら、いいじゃない」

　シャープペンシルと消しゴムと筆箱、ノートの四点セットだ。全て、赤色だ。すーちーちゃんに当たるかどうかはわからなかったけれど、すーちーちゃんの好きな赤色を選んだのだった。
「おっ、これ、すげえや。コウモリのマークが付いている」
　隣の竜太郎君が覗きこんだ。
「コウモリ？」
　あたしは、自分が買ったのに、コウモリのマークがあることに気づかなかった。色のことばかりに気を取られていたからだ。
「ごめん。コウモリのマークがあることに気づかなかったの」
「ううん、いいの。あたしの大好きな赤色だし、コウモリもあたしは好きよ。あたしの家の神社にもコウモリは住んでいるから。ありがとう、さやかちゃん」
「ねえちゃん。僕にもコウモリマークをくれよ」
「あんたは何が貰えたの？」
　すーちーちゃんが竜太郎君に聞いた。
「僕はこれ」
　竜太郎君が差し出したのは黒いマントとステッキ。
「どう、かっこいい？」
　竜太郎君は首にマントを巻き、ステッキを右手に持つと、「ブーン」とヒーローになったつもりで、体育館を走り出した。
「バッカみたい」
　その後ろ姿を見て、あたしとすーちーちゃんは二人で笑った。
　こうして、無事かどうかわからないけど、クリスマス会が終わった。あたしのベッドの横には、すーちーちゃんと竜太郎君の人形がいるけど、夜中に動き出すことも、人間の血を吸うこともない。

十　お参りのお正月

「さあ、お参りに行くぞ」

　お父さんの声に促されて、あたしは玄関を出た。

　今日は、元旦。あたしの家では、元旦の日には、近くの神社にお参りに行く。その後、近所に住んでいる、お父さんとお母さんのそれぞれの実家にあいさつに行く。もちろん、あたしの目的はお年玉を貰うことだ。もう、既に、お父さんとお母さんからはお年玉を貰っている。あたしは親戚が少ないので、お年玉を貰う相手は限界がある。後、貰える先は、お父さんのお兄さん、と、お母さんの弟の、二人の伯父さん、叔父さんだけだ。とにかく、家族の年中行事のひとつであるお参りに行かないといけない。そうしないと、お年玉も貰えない。

　神社は、普段は静かだが、今日は、お正月だから、近所の人が大勢参拝して、賑やかだ。神社には駐車場がないため、参道の道路には次々と車が止まり、また、参拝が終わった人は車を出発させている。その空いた隙間に、参拝の車が止まる。あたしの目的は、もちろん、この後の、お年玉倍増計画だが、すーちーちゃんにも会いたい。

　すーちーちゃんは、この神社の本殿に住んでいる。お正月の準備で大変だろう。冬休みに入ってからは、すーちーちゃんとは会っていない。今日が、今年、初めての出会いだ。

「甘酒はいかかがですか。ぜんざいもありますよ」

　鳥居をくぐった社務所では、お世話をする人が、お接待をしている。

　甘酒は、以前、口にしたことがあるけれど、飲んだだけで、ほっぺが赤くなり、お参りが終わった後、家に帰って、そのまま一日中、眠ってしまった苦い、いや、甘い、甘い酒っぽい、思い出がある。手水で手を洗い、神社の本殿の前に立つ。

「はい。お賽銭」

　お父さんが金ぴかの五円玉を渡してくれた。御縁がありますように、五円玉をお賽銭としているが、貰う方にしてみれば、五円よりも十円、十円よりも五十円、五十円よりも百円方がいいだろう。この五円玉は、すーちーちゃんに届くのだろうか。

　賽銭箱に、五円玉を投げ入れた。他の人のお賽銭と一緒に転がって、箱の中に吸い込まれていった。鈴を鳴らし、二礼二拍手一礼。目を瞑ってお願いをする。

　今年もいい年でありますように。すーちーちゃんと仲良くできますように。後、竜太郎君とも。すーちーちゃんとの出会いの時や、遠足、クリスマス会などのことが思い出された。

「さやか、何、お願いしたの。長い間、お願いしていたみたいだけど」

　お母さんが尋ねてきた。

「ひ・み・つ」

　本殿の扉は、普段は閉じられている、今日は開かれ、中に、数人の人が座ってお祈りしている。あたしは、中を覗く。すーちーちゃんを確認するためだ。祭壇の前には、鏡が置いてある。あたしは、あたしの顔が見えたような、あたしの目と会ったような気がする。鏡は、おしゃれをするためではなく、自分を見つめるためなのだろう。本殿の中に、目をうろうろさせるけれど、すーちーちゃんはいない。

「さあ、いくぞ。さやか」
　お父さんが急がせる。
「うん」
　あたしは、賽銭箱の前から動く。
「おみくじを買うか」
　お父さんが巫女さんの前に並んだ。すーちーちゃんだ。長い髪を束ねて、白い巫女姿だ。なんだか、いつものすーちーちゃんじゃない。大人に見えた。
　すーちーちゃんは、勉強でも、何でも、すぐに吸収してしまい、前から知っていたかのように振る舞うから、あたしは、いつも感心する。あたしなんか、とてもかなわない。
　次から次へとおみくじを渡していくすーちーちゃん。とても忙しそうだ。それでも、あたしは声を掛けた。
「おめでとう」
「おめでとうございます」
　ございます　か。やっぱり、あたしより一枚も二枚も上手だ。大人だ。互いに、二言、三言、言葉を交わす。でも、すーちーちゃんは巫女の仕事で忙しそうなので、あまりゆっくりと話せない。
「さやか。お友達か」
　お父さんがあたしに尋ねてきた。お父さんには、学校の友だちのことは話をしていない。
「あなた。さやかの仲の良いお友達なのよ。それに、とても勉強ができるのよ」
　お母さんがあたしの代わりに答える。お母さんには、ある程度だけど、話をしている。
「へえ、そうか。それじゃあ、さやかのこと、今年もよろしくお願いします」
　お父さんがすーちーちゃんに頭を下げた。
「こちらこそ」
　すーちーちゃんも礼をする。
「へえそうか、じゃないでしょう」
　お母さんが突っ込む。確かに、気の抜けた、へえそうかの後に、改まって、今年もよろしくだなんて、おかしい。あたしは思わず噴き出した。あたしに顔を見て、すーちーちゃんも笑った。お父さん、お母さん、あたしの順番で、おみくじをひいた。
「三番」
　あたしは、取り出した棒を巫女姿のすーちーちゃんに見せる。
「三番ですね」
　すーちーちゃんは振り返り、箱の中から、三番のおみくじを取ろうとする。
「これは、僕の仕事だい」
　突然、現れたのが竜太郎君。竜太郎君も白い姿に袴を着ている。すーちーちゃんよりも先に三番のおみくじを手で掴むと、あたしに手渡してくれた。
「ありがとう」

　あたしはお礼を言った。
「竜太郎。あんた、邪魔だから、向こうに行ってなさい」
　すーちーちゃんが巫女言葉から、いつもの言葉に戻った。
「べええだ」
　竜太郎君は立ち上がると、本殿の中に消えた。
「ほんとに、もう」
　おしとやかだったすーちーちゃんが、いつものすーちーちゃんに戻ってくれた。あたしは、少し、ほっとした。
「大吉か？」
　お父さんが尋ねてきた。
「まだ、開いていない」急いで開く。吉だ。
「どうする？」あたしは両親におみくじを見せた。
「どうするって？　おみくじは持って帰ってもいいいし、神社の境内の木に結んでもいいのよ」
　お母さんが説明してくれた。あたしは、おみくじを木に結えることにした。どうせ、家に帰っても、机の片隅に追いやられて、見ることもないだろうけれど、この神社のどこかに結えておけば、すーちーちゃんに会いに来た時に、いつでも思い出すことができるからだ。
　あたしは結び木を探す。狭い境内だ。近くの木の枝には、たくさんのおみくじが結えられている。これじゃあ、もう一度来た時に、あたしのおみくじかどうかがわからない。あたし専用の木はないかな。境内の裏に回る。そこに、竜太郎君がいた。
「さやかお姉ちゃん。これ面白いよ」
　竜太郎君は紙飛行機を飛ばしている。少し、小さい。それに神が薄い。よく見ると、おみくじだ。
「罰が当たらないの？」
　あたしは心配して尋ねた。
「だって、運が空を駆けるんだよ。それに、これが本当の、神飛行機だい」
　保育園児にしては、洒落たとを言う。
「あたしもやろうっと」
　あたしは自分のおみくじを紙飛行機にした。そして、ゆっくりと宙にすべらす。紙飛行機は、空に線路があるかのように、一定の方向に飛んで行く。そして、地面に落ちた。
「わーい。勝ったぞ。僕の方が、遠くに飛んだ」
　あたしは、別に、競争したつもりじゃないけれど、負けたと言われると、むきになってしまう。落ちた紙飛行機、そう、おみくじを拾うと、ひとさし指を舐め、風の方向を確かめ、追い風に乗って、紙飛行機を飛ばす。紙飛行機は、林を抜け、神社の塀から塀まで飛んだ。
「わあ、すごいや。うまいね。さやかお姉ちゃん」
　竜太郎君が誉めてくれた。　さっきは、負けた気がしたけど、今は、勝った気分だと、妙に嬉しい。おかしなもんだ。

「竜太郎、何、やってんの」
　大きな声がした。巫女姿のすーちーちゃんが立っていた。
「早く、部屋に戻りなさい。ママがそう言っているよ」
「一日中、部屋にいるのには飽きたよ」
「じゃあ、あたしと勝負。あたしが勝ったら、部屋に戻るのよ」
「いいよ。反対に、僕が勝ったら、外で遊び続けるよ」
「どうぞ。じゃあ、勝負よ。さやかちゃん、審判員をして」
　あたしは、急きょ、紙飛行機飛ばし大会の公認審判員になった。　線を引く。　その後ろに、二人が並ぶ。二人とも、紙飛行機を持っている。
　それ。二人が勢いよく紙飛行機を飛ばす。紙飛行機は風に乗って、神社の裏の林の間をすり抜ける。
「あっ」
　竜太郎君の紙飛行機が木の枝に当たって、落ちた。すーちーちゃんの紙飛行機はまだ空を飛んでいる。
「あたしの勝ちね」
　すーちーちゃんの勝利宣言。
「ちぇ」
　竜太郎君は自分とすーちーちゃんの紙飛行機を取りに行った。
「わーい」
　誰かの声がする。後ろを振り返ると、他の子どもたちがおみくじで作った紙飛行機を飛ばしている。
「さやか。じいちゃんちに、行くぞ」
　お父さんの声だ。あたしはすーちーちゃんと竜太郎君に手を振って、神社を後にした。神社の裏では、まだ、子どもたちが神飛行機を飛ばして、遊んでいた。

十一　雪合戦の一月

「あっ、雪だ」すーちーちゃんが叫んだ。
「ほんとう」あたしは教室の窓に目をやった。
「雪だ。雪だ」
　男の子たちがはしゃぎだした。
「静かにしなさい」
　先生が叱った。それでも、男の子たちは席を立って、教室の窓の側から雪を眺めている。
　雪は、みるみるうちに、校庭を真っ白に染めていく。
「さあ、授業の続きですよ。席に戻りなさい」
　先生が窓際に近づいてきて、男の子たちを席に戻す。先生の授業が再開された。それでも、クラスのみんなはうわの空だ。あたしは、教科書を読むふりをしながら、ちらちらと窓の外を眺める。雪もちらちらと降り続ける。すーちーちゃんも、クラスの友だちも一緒にちらちらと眺め続ける。
「キンコンカーンコーン。キンコンカーンコーン」
　授業終了のベルが鳴った。授業が長かったのか、短かったのか、わからない。とにかく、あたしの頭の中は、雪のことで、真っ白になっていた。ホームルームが終わる頃には、運動場だけでなく、体育館や学校の屋根、中庭、先生たちの車などが、雪で真白に覆われていた。
「皆さん。学校の外は、雪が降っています。危ないですから、途中で、寄り道をしないで、真っすぐに家に帰りましょう」
　先生が注意するけれど、めったに降らない雪なのに、寄り道をしないわけがない。あいさつの当番の声に合わせて、
「先生、さようなら」
「皆さん、さようなら」
　あたしたちは、挨拶もそこそこに、教室からダッシュした。もちろん、寄り道をするためだ。運動場は、もう、既に、他の学年や他のクラスの生徒たちで一杯だった。みんな、思い思いに、雪だるまを作ったり、雪合戦を楽しんでいる。あたしとすーちーちゃんは、その様子を見つめていた。
「ボン」
　あたしのカバンに雪が当たった。振り向くと、そこには、クラスメイトの山崎君がいた。
「さやか、雪合戦しようぜ。すーちー、も一緒にどうだ」
　その声を聞くか聞かないかのうちに、すーちーちゃんは雪を掴むと固めて、山崎君に向かって投げた。
「うっ」
　雪玉は宣戦布告の山崎君の口にすっぽりと入った。すごいコントロールだ。すーちーちゃんは名投手だ。プロ野球選手になれる。ひょっとしたら、大リーグにだって行けるかもしれない。
「おえ」

山崎君は雪を口から吐き出すと、自分からやってきたくせに、「よくも、やったな」と、あたしたちに雪を投げつけてきた。あたしとすーちーちゃんが応戦する。二対一だ。あたしたちが優勢だ。
「よし。俺も参加するよ」
福崎君が仲間に入って来た。二対二だ。互角だ。
「がんばって」
同級生の山本さんが仲間に加わった。三対二だ。こちらがやや優勢。
そうこうするうちに、クラスの男子と女子による対抗雪合戦になった。
「わあ」
「きゃあ」
「はははははは」
「誰だ、ぶつけたのは」
「痛いじゃないか」
「ちくしょう」
「僕も参加する」
「あたしもやるわ」
雪合戦の輪は広がり、運動場にいる、男子と女子による全員での雪合戦に広がった。雪降る中に、雪の玉が飛び交い、あたしたちの体も雪だるまになってしまいそうだった。雪は相変わらず、降り続き、雪の玉を作っても、まだ、雪はすぐに補充された。
「きゃあ」
すーちーちゃんの叫び声がした。すーちーちゃんの顔に雪の玉が当たったのだ。すーちーちゃんは大の字に倒れた。
「大丈夫？」
あたしはすーちーちゃんの手を引っ張って、体を助け起こした。すーちーちゃんが倒れた後には、すーちーちゃんと等身大の跡が残った。それを見て、すーちーちゃんが、もう一度、大の字に倒れ、立ち上がった。すーちーちゃんの人間スタンプが更に、運動場にもうひとつ増えた。
「なんだか、面白い」
あたしもすーちーちゃんの真似をして、大の字に倒れた。そして、立ち上がる。大地にに、あたしのスタンプができた。
「お前たち、何、やってんだよ」
あたしたちが雪合戦をやめたのでで、山崎君を始め、男の子たちが近づいてきた。
「人間スタンプを作っているの」
「人間スタンプ？」
「ほら」
あたしは大の字に倒れて見せた。起きあがると、あたしの型のスタンプができた。
「へえ、面白いや」

　山崎君が倒れた。山崎スタンプができた。それを見て、他の子どもたちも、次々と、雪が降り積もっている箇所に倒れて、自分のスタンプを作った。
「このスタンプが動き出せばいいのに。そうすれば、一緒に、雪合戦ができるのに」
　すーちーちゃんが呟いた。
「そんな、馬鹿な」と、あたしは思ったけれど、本当だったら、もっと面白いと思う。それに、すーちーちゃんが言うと、本当のことになりそうな気がした。
　雪のスタンプは、砂場や鉄棒のなど、運動場全体に広がった。そのスタンプの上に雪が降り積もり、あたしたちのスタンプを消した。
今度は、あたしたちと雪との競争だ。運動場では、次々と人が倒れ、起き上がり、その上を雪が降り積む。そうこうするうちに、雪は降り止み、運動場は、子どもたちのスタンプだらけになった。
「高い所から、スタンプを見てみない」
　すーちーちゃんが提案した。
「よし、行こう」
　山崎君が先頭に立って、校舎の四階に上がった。四階から眺める運動場の景色は壮観だった。運動場に、雪の人型による全校生徒が集合している。
「朝礼みたい」
　運動所は、あたしたちのスタンプで隙間なく埋められていた。それは、スタンプと言うよりも、あたしたち自身の生まれ変わりのようであった。
「あなたたち、もう、十分、遊んだでしょう。もう、お家に帰りなさいよ」
　先生たちが四階に上がってきた。先生たちはあたしたちが運動場で雪合戦や人間スタンプを作っていたのを知っていたのだ。
「はーい」
　あたしたちが階段を降りようとしたら、校長先生らしき人影が、いつもの朝礼台の近くで大の字に倒れ、起き上がって自分の型を確認すると、校舎に戻ろうとしていた。

十二　豆まきの二月

「さやか、豆まきを見に行くか」
　パパから声が掛った。
「豆まき？」
　あたしはええっという顔をした。
「何だ、さやか。節分を知らないのか。近くの神社で、豆まきをするそうだ。行ってみるか」
　近くの神社は、すーちーちゃんの家だ。
「豆だけじゃないぞ。お菓子もまく
「行く、行く」
　二つ返事だ。きっと、すーちーちゃんが、お正月の時のように、巫女姿なのだろう。
　神社の境内には近所のおじさんやおばさんなど、多くの人が既に集まっていた。社殿の上には、神主さんや地元の役職の人が正装していた。でも、すーちーちゃんや竜太郎君は見えない。きっと、社殿の奥で節分の準備しているのだろう。
　神主さんのお祓いの後、地元の代表の方が、「鬼は外、福は内。鬼は外、福は内」と声をあげながら、社殿の上から豆をまく。豆は地面に落ちてもきれいなように、小さな袋に入っている。集まった人たちは、手を思い切り伸ばし、豆やお菓子を掴もうとする。
「ほら、さやか、取れたか」
　パパが豆の袋を見せてくれた。あたしの手には何もない。大人と子供では身長差がありすぎる。あたしがいくら背伸びしたり、ジャンプしたりしても、かなわない。じゃあ、どうする。このままじゃ、一つも豆が取れない。何かが足に触った。下を見る。誰かが背をかがめ、地面に落ちた豆やお菓子の袋を拾っている。竜太郎君だ。ズボンのポケットは膨れ上がっている。
　そうか。あたしの生きる道はこれだ。大人たちは空の戦いに夢中で、地面に落ちた豆には関心がない。あたしも竜太郎君のまねをして、地面に落ちた豆やお菓子を拾う作戦に変えた。竜太郎君の後を追う。竜太郎君がつかみ損ねた豆やお菓子を拾う。あたしのポケットもすぐにいっぱいになった。でも、大人たちの足に蹴られたり、踏まれたり、体中は名誉の負傷でいっぱいになる。
「以上で、今年の節分は終わります」
　代表者が終了宣言すると、なんだ、もう終わりかよと言いながら、集まった人たちは豆やお菓子を抱きかかえ、満足そうな顔で、神社の境内からあっと言う間にいなくなった。残ったのは、地面に落ちた豆などを拾っている遼太郎君やあたし、その他の子どもたちだった。
「すごいね。竜太郎君」
　あたしは収穫物で、ポケットなど、体中が膨れ上がっている遼太郎君に声を掛けた。
「そうでもないよ」
　と、胸を張る竜太郎君。
「すーちーちゃんはどこ？」
「姉ちゃんは豆まきが嫌いなんだ」

「どうして？」
「なんか、体がぶるぶるするんんだって。それに、パパやママも豆まきが嫌いなんだ」
「ふーん」
　納得したような、納得していない返事だ。
「竜太郎。何やってんの。あれだけ、豆まきには行っちゃいけないっていったでしょう」
　すーちーちゃんだ。声が怒っている。
「すーちーちゃん。どうしたの？お菓子を拾ったの。一緒に食べる？」
　あたしが右手にお菓子の袋を持って近づこうとすると、後ずさりするすーちーちゃん。
「どうしたの？」
「あたし、豆が嫌いなの。豆まきが嫌いなの。これは、立野子一族の教えなの」
　一族か。すごい言葉だ。あたしのうちはパパとママとあたしの三人家族。それに、パパのお母さんとお兄さん、ママのお父さんとお母さん、弟が一族になるのか。でも、その一族に特段の教えはない。あるとすれば、健康が一番、だ。
「どうして豆まきが嫌いなの」
　あたしは尋ねる。
「だって、豆まきは、鬼は外、って、鬼に豆をぶつけるでしょう。豆をぶつけられる鬼がかわいそうじゃない。鬼は何も悪いことなんかしていないのに。ただ、見た目が怖いだけでしょう。そんなの、豆をぶつける理由にならないわ」
　すーち＾ちゃんがこんなに怒るのは初めてだった。確かに、すーちーちゃんの言い通りだ。鬼に豆をぶつける正当な理由はない。ただ単に、鬼の見た目が怖いだけだ。でも、すーちーちゃんは鬼じゃない。豆をぶつけられる訳じゃない。それに、鬼なんて架空の生き物じゃない。そんなことに怒らなくてもいいのに。
「だから、あたしの家では、豆まきが嫌いなの。さあ、行くわよ。竜太郎」
　すーちーちゃんは怒ったように社殿の裏に消えた。
「待ってよ、姉ちゃん。そんなに急いだら、折角、拾ったお菓子が落ちちゃうじゃないか」
「そんなもん、捨てちゃいなさい」
「もったいないよ」
　竜太郎君はお菓子の袋で膨れ上がった体を両手で押さえながら、すーちーちゃんの後を追う。あたしは、すーちーちゃんと一緒に食べようと思ったお菓子の袋を右手にぶら下げたまま、二人の後姿を眺めるだけであった。
　すーちーちゃんは、本当に不思議な子だ。

十三　ひな祭りの三月

「今日、家に遊びに来ない？」
　六時間目の授業が終わった後、すーちーちゃんが声を掛けてきた。豆まき以来、すーちーちゃんと少し心の距離が遠くなったような気がしたが、すーちーちゃんは、昔のままだ。あたしが勝手に意識しすぎただけなのだろう。
「うん、いいよ」
　あたしは二つ返事で答えた。学校から一緒に帰る。神社の鳥居をくぐって、いつものように、二礼二拍手すると社殿の中に入った。一番奥の祭壇から階段を下りる。
「すごい」
　あたしは目を見張った。すーちーちゃんの部屋には、巨大なひな祭りの人形が飾られていた。その巨大さは、人間大だった。いや、よく見ると、人間だった。お雛様は、すーちーちゃんのお母さんだ。肌は、透き通り、静脈の血管がより一層、青く浮き出ている。
　じゃあ、その隣の人は誰？すーちーちゃんのお父さんか。すーちーちゃんのお父さんに会うのは初めてだ。お父さんもお母さんに負けじと色が白い。それも、色が白いと言うよりも透明に近い。よく目を凝らせば、血管だけじゃなく、内臓までもが見えるような気がする。もちろん、そんなことはありえない。
　お父さんがお内裏様のかっこうで、お母さんがお雛様の姿か。洒落ている。ひな人形を飾るんじゃなくて、自分たちがひな人形に扮するだなんて。すーちーちゃんがユニークなのも、このお父さんとお母さんの血を引いているためか。
「いらっしゃい。よく来てくれましたね」
　お内裏様が立ち上がった。
「さやかちゃんですよ。あなた、いつも、すーちーが学校でお世話になっているのですよ」
　お雛様が続く。
「ああ、そうですか。ありがとうございます。折角の機会ですから、ゆっくりとしてください。私は仕事があるので、失礼します」
　お内裏様はにこっと笑って部屋から出て行った。笑みを浮かべた口元から白い歯がきらっと光った。にこっ、きらっ。色の白さに続いて、これも、すーちーちゃん一族の特徴だ。あたしはお内裏様とお雛様に見とれていたので、返事が遅れた。
「おじゃします。さやかです。よろしくお願いします」
　何がよろしくなのかはわからないけれど、スポーツ少年団の入部の時のように、頭をぺこりと下げた。
「それじゃあ、私はおやつを準備しますね。さやかちゃん。ゆっくりしてね」
　お雛様は着物の煤をゆっくりと滑らせながらキッチンの方に向かった。
「さやかちゃん、座ろう」
　すーちーちゃんがソファーに腰を下ろす。あたしも続く。正面には、先ほどまでお内裏様とお雛様が座っていた雛飾りがある。金の屏風やぼんぼり、桃の花、笛や太鼓がきれいに飾られて

いる。
「すごいね。すーちーちゃん」
　あたしはひな飾りに見とれている。
「そう。毎年、飾っているよ。さやかちゃんのとこは、飾っていないの？」
「飾ってはいるけど、小さな人形よ。すーちーちゃんのとこのように、お父さんやお母さんがお内裏様やお雛様にはならないわ」
「そうなの。あたしが生まれたときから、パパやママは、おひな祭りになると、こうしてお内裏様やお雛様のかっこうをしているわ。だから、これが当たり前だと思っていたわ」
　やはり、すーちーちゃんはあたしたちと違う。あたしは頭の中で、パパやママがお内裏様やお雛様に扮した姿を想像する。ぷっ。吹き出した。全然、似合わない。取ってつけたようだ。顔が着物から浮いている。やはり、すーちーちゃんのお父さんやお母さんのように、色白で、優雅な雰囲気を持っていないと、お内裏様やお雛様にはなれない。
「雛飾りに座ってみようよ」
　すーちーちゃんがあたしを誘う。
「えっ」
「だって、さやかちゃん、ずっと雛飾りを見つめているじゃない。座ってみようよ」
　すーちーちゃんに促されて、あたしは雛飾りの中に一番上に座る。
「さやかちゃんがお雛様で、あたしがお内裏様」
　二人とも雛飾りの中だ。あたしたちの下には、等身大の三人官女や五人囃子、随身、仕丁の人形が座っている。この中にいると、普段の服装だけど、お雛様になった気分になる。横では、お内裏様のすーちーちゃんが、にこっ、きらっ、としている。
「ねえちゃん、ずるいや。自分だけいい思いをして」
　突然の声だ。竜太郎君だ。一番下の傘を持っていた人形が動いた。そして、あたしたちの間に入ってきた。
「竜太郎はお内裏様の役じゃないでしょ。傘を持っていなさい」
「姉ちゃんだって、五人囃子じゃないか」
「パパがいないときは、あたしがお内裏様なの。向こうに行ってよ」
「姉ちゃんは女だろ。お内裏様はぼくの役だい。そっちこそ、向こうに行けよ」
　二人がお内裏様の役をめぐって口喧嘩を始めた。二人の喧嘩は今日が初めてじゃない。いつも何かで喧嘩している。それだけ仲がいいことの証拠なのだろう。ひとりっ子のあたしには味わえない姉弟喧嘩だ。
「お友達がいるのに、何を喧嘩しているの」
　本物のお雛様が来た。すーちーちゃんのお母さんだ。お盆の上には、赤いジュースと赤いひしおもちがのっている。
「喧嘩ばかりしていないで、おやつを食べましょう」
「わーい。おやつだ。おやつだ」
　竜太郎君は、おやつを見ると、さっきまでの喧嘩のことは忘れて、ソファーに向かって飛び跳

ねる。
　すーちーちゃん、竜太郎君、あたしの三人が仲良く横に並んでソファーに座り、おやつを食べる。
「これ、美味しいや」
　竜太郎君がひし餅にかぶりつく。喉に詰まりそうになったのか、目の前のグラスのジュースを掴む。
「ママ。これ、何の生き物の血なの？ちょっと味が変だよ」
「バカ。これはジュースよ。血じゃないわ」
　いつものように、すーちーちゃんが竜太郎君の頭をポカリと叩く。
「痛い。いつもは、犬の血や猫の血、たまには人間の血を飲んでいるくせに」
「変なこと言うもんじゃない」
　また、すーちーちゃんが竜太郎君の頭をポカリと叩く。
「痛っ」
　竜太郎君は黙ったまま血のようなジュースを飲んでいる。あたしは、冗談だろうと思いながら、恐る恐る、竜太郎君の言う血のジュースを飲む。うーん。何とも言えない。しょっぱいような、甘いような。でも、ひし餅は美味しい。すーちーちゃんのお母さんはあたしたちの様子をにこにこしながら見て、部屋を出て行った。
「場所取った！」
　おやつを食べ終えた竜太郎君がひな段のお内裏様の場所に陣取った。でも、すーちーちゃんは気にしていない。竜太郎君はしばらくお内裏様の場所にいたが、すーちーちゃんに相手にされないものだから、また、ソファーに戻ってきた。じっとしていれないのか、ジャンプしだした。その振動であたしたちのお尻も上下する。
「こら。静かにしなさい」
　すーちーちゃんが怒る。
「だって、つまんないもん」
　竜太郎君はジャンプし続ける。すーちーちゃんが立ち上がった。そして、負けまいとジャンプをし始めた。すーちーちゃんと竜太郎君がジャンプする度に、その間のあたしも飛び上がる。
「さやかちゃんもやろう」
　すーちーちゃんに促されて、あたしも立ち上がった。三人がソファーの上でジャンプし始めた。
「負けないぞ」
「どうぞ」
　負けん気の強い竜太郎君。はひょうひょうとしているけど、内面は、決して竜太郎君に負けたくないと思っているすーちーちゃん。その間で、二人には勝つ気がしないあたし。次第に、二人のジャンプの高さは天井まで近づいていく。
「ペチャ」

「ペチャ」
　大きな音がした。あたしの両隣でジャンプしていたすーちーちゃんと竜太郎君の姿はない。降りてこない。天井を見上げる。二人が天井に引っついている。それも、口で天井に吸いついている。
「すごい」
　あたしがソファーから二人に声を掛ける。すーちーちゃんの必殺技の強力バキュームだ。竜太郎君も同じ技ができたんだ。でも、二人とも口で天井に吸いついているので、返事ができない。ただ、二人とも手でガッツポーズをしている。
「ドテ」
「ドテ」
　二人が同時に落ちてきた。その反動で、あたしが飛び上がった。チャンスだ。あたしも口で天井に吸いついてみよう。あたしはすーちーちゃんの親友だ。これまで一年間、一緒に遊んできた。すーちーちゃんの能力を目のあたりにしてきたんだ。二人にできるんだったら、あたしにできないことはない。妙な競争心が湧いてきた。あたしの目の前に天井が近づく。口をとがらす。唇が天井に触れた。鼻も額もほっぺも天井に当たった。
「バン」
　あたしの目に星が飛んだ。あたしの体は天井に滞在することなく、そのまま重力に従って落下。ソファーに倒れ込み、あたしは気を失った。
「大丈夫？」
　すーちーちゃんが心配そうに声を掛けてきた。あたしは目を開けた。「大丈夫」と答えたものの、体は動かない。顔が痛い。
「家まで送ろうか」
「うん」
　あたしはすーちーちゃんの背中におぶさってもらって、神社を後にした。すーちーちゃんの背中はあったかい。まるで羽毛に包まれているみたいだ。でも、楽しいひな祭りが、気を失うとんだひな祭りになった。もちろん、あたしは飛ぶつもりはなかったのだが。やはり、すーちーちゃんにはかなわない。あたしはすーちーちゃんの背中で、おひな様に扮した自分を夢見ていた。

十四　桜の三月

「皆さんに、残念なお知らせがあります」
　担任の川崎先生が教壇に立った。
「龍野子さん、前にいらっしゃい」
　あたしは、隣の席のすーちーちゃんの顔を見た。すーちーちゃんは、いつものように、微笑をたたえている。すーちーちゃんが横井先生の隣に立った。
「龍野子さんは、お父さんの都合で、この三月で引っ越して、別の学校に行くことになりました。折角、お友達になったのだけれど、残念です。それじゃあ、龍野子さん。クラスの皆さんに、ひと言、言ってください」
　すーちー笑顔はいつもの通りだ。
「皆さん、この一年間、仲良くしてくれて、ありがとうございました」
　ぴょこんと、ほんとに、ぴょこんと、頭を下げた。口からは、あの可愛い八重歯がきらりと光った。出会った時と同じだ。
　みんなが拍手する。だけど、あたしは、突然のことに驚き、体が固まって動かなかった。もちろん、拍手なんかできない。すーちーちゃんが隣の席に戻ってきた。
「すーちーちゃん、本当に引っ越すの？」
　嘘だと言って欲しかった。
「うん。昨日、急に決まったの」
　すーちーちゃんはあたしの顔を見た。
「そうなんだ・・・・」
　あたしは、もう言葉がなかった。
　帰り道、すーちーちゃんと一緒に帰る。いつものような楽しい会話はない。お互いに黙ったままだ。神社に着いた。すーちーちゃんの家だ。このまま別れたくない。
　あたしは、すーちーちゃんと一緒に、鳥居をくぐった。神社の本殿の前に立つ。すーちちゃんが階段を上がる。扉が開いた。竜太郎君だ。
「お姉ちゃん、お帰り。あっ、さやかちゃんだ。ママ。さやかちゃんだよ」
　竜太郎君が奥に引っ込んだ。その後から、すーちーちゃんのママが顔を出した。相変わらず、色白で、きれいだ。今日は特別に、色が白いように思えた。
「あら、さやかちゃん。短い間だったけど、すーちーと仲良くしてくれてありがとう。ほんとうは、家の中に入ってもらいたのだけど、引っ越しの準備で、荷物でいっぱいなの。ごめんね」
　すーちーちゃんのお母さんが軽く頭を下げた。
「いえ、いいんです。お忙しいのに、お邪魔してすいません。じゃあ、あたし帰ります」
　あたしは、すーちーちゃんに小さいバイバイをした。神社の鳥居の所で、振り返ると、お母さんや竜太郎君はいなかったが、すーちーちゃんがあたしの方を見つめていた。あたしは、今度は大きく手を振り、バイバイと大きな声を上げた。
　翌日、あたしは神社に向かった。すーちーちゃんの家だ。鳥居をくぐり、本殿の前に立った。

ひっそりとしている。あの、「お姉ちゃん」と叫ぶ、元気な竜太郎君の声も、「こらっ、竜太郎」と叱る、すーちーちゃんの厳しい声もしない。
「あら、小さいのに、熱心だね。お参りかい」
　境内の掃除をしていたおじいさんが箒を履きながら尋ねてきた。
「ここで、住んでいた、すーちーちゃんは、もう、引っ越ししたんですか」
　掃除のおじいさんは、不思議そうな顔をしながら、「ここは小さな神社だから、社務所には誰も住んでいないよ」と答えた。
「でも、あたしの友だちのすーちーちゃんは、昨日まで、この本殿に住んでいたんです」
「本殿は、お参りする所だから、人なんか住めないよ」
「いえ、昨日まで、確かに、それも一年間、友達が住んでいたんです」
　あたしがあまりにも真剣だったせいか、おじいさんは手を休め、ポケットからじゃらじゃらと鍵を取り出すと、本殿の扉を開けた。
「ギー」という音がした。
「もう、古いから建てつけが悪いんだよな」
　おじいさんが誰に言うでもなく、一人、呟いた。
「上がってもいいですか」
「どうぞ」
　あたしは靴を脱ぐと、本殿の中に入った。
「年、数回しか入らないから、少し湿気ているだろう」
　おじいさんは、窓を開けた。あたしは、祭壇の後ろに回った。確か、ここから、部屋がつながっていたはずだ。　だけど、祭壇の裏には、どこを探しても、扉はなかった。
　おじいさんは、あたしが本殿の中を探し回っているのを見て、「ほら、誰も住んでいないだろ。まあ、住んでいるとしたら、神様だろうかな」と言った。
　神様か。だけど、すーちーちゃんも、竜太郎君も、神様には見えなかった。
「おじいさん。ありがとうございました」
　あたしの頭の中は何がどうなっているのかわからず、こんがらがっていた。でも、いつまでも、ここにいる訳にはいかない。あたしは、礼を言うと、本殿を出た。靴を履き、神社の境内を一周した。
「バサバサバサ」羽の音だ。
　あたしは空を見上げた。本殿の屋根の黒い物が動いた。何かの生き物だ。
　鳥かな。
　あたしは、黒い影を見た。黒い影が、突然、あたしに向かってきた。それもふたつ。
「きゃあ」
　あたしは思わず、叫び声を上げた。黒い影はあたしの目の前を通り過ぎて、真上を飛んで行った。ふたつの黒い影は、互いにじゃれあうかのように、空中で交差している。
「こうもりか。家に帰りそびれたのかな」

　知らない間に、あたしの横におじいさんが立っていた。
「こ・う・も・り・・・」
　空はまっかだった。すーちーちゃんの大好きな色だ。あたしはいつまでも、二匹のこうもりが飛んでいった空を見つめていた。